

---

# その空を仰ぎ見る者は……～野望は終えぬまま～

目目連

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その空を仰ぎ見る者は…… 野望は終えぬまま

### 【コード】

N9967M

### 【作者名】

目目連

### 【あらすじ】

都に店を構えるとある商人。彼が目指すはただ一つ……。

## 1話 猫耳堂の店主（前書き）

どうも。お久しぶりの人も、初めましての人も、目目連です。

こちらは前作『その空を仰ぎ見る者は……』の続編になります。

もしお読みなつて興味を引かれたかたは前作も読んでみて下さいね。

それでは本編をどうぞ。

1話 猫耳堂の店主

『今夜は……………』

「……………四人で」

「初めから、なに言ってるんですか」

僕はため息を吐く。

全く、この娘たちは日に日にはちやけていくな。

「ちょっと旦那、遊んでないで手伝ってよ。今日は三国協定を結ぶ大事な会議でウチにも発注きてんだからね」

「僕は遊んでませんよ。二人に……………」

って、居ないッ!? 逃げやがったな、アイツら。

「旦那ー。早くー」

「あーはいはい。今、行きますよ、朝夜」

三国協定。

どうやら三国の平和の象徴として都に北郷君を置き、その周りに三国の首脳たちを置くことで大陸全土に乱世の終わりを示すようだ。

うむ。確かに良い考えですね。

常に三国の重鎮たちが配置されているのなら威光としても申し分無いでしょうしね。

「旦那ー。早くしないと曼珠ちゃんが店の看板“犬耳堂”に張り替えちゃうよ」

「ちょっと待てえい!!」

僕は慌てて外に駆け出し、曼珠の愚行を止める。

『チッ』

「筆談で舌打ちしたよ、この子ッ!？」

はあ。やれやれ僕の賑やかな生活は変わらないみたいですね。

僕はそう思いながらも満更でもない顔で空を見上げる。

蒼天の、清々しい空だっ

。

バシャーン。

僕が水を頭から被る音。

ピチヨピチヨ。

僕が水を滴したたらす音。

「あ、ごめん。てがすべった。すぐふかなきゃ」

ほほおう。思いつきり桶を持って、手が滑った、ですか…………。

そこには桶を持った沙華が立っていた。明らかに僕に向けて放ったような姿勢のまま。

「あ。かんばんにも…………ふかなきゃ」

「沙華。とりあえずその“兎”の文字の入った看板は置いていって  
もらおうか」

「チツ。……………しねばいいのに」

「おおいッ！？なんか酷くなってるぞッ!？」

「もう煩いなッ。遊ぶなら外でやりなさい」

また朝夜に怒られてしまいました。

「すみません、お母さん」

「誰がお母さんだッ!？」

ゲシゲシと蹴る癖は未だ健在のようです。

「あ。そう言えば曹操様から文がきてたよ、旦那？」

「ん、文?なんでしょうかね……」

さて、それでは目を通すのでしょうか。

………あ、その前に。

「二人のこれは没収です」

僕は二人の“犬”と“兎”の看板を取りあげて自室へ戻る。

『幺戯は甘いの………』

「かんばんは一つじゃない」

二人はさっ、と懐から予備を取り出す。

「はいはい。二人とも遊んでるとおやつ抜きだからね」

『なッ。それは困る』

「ごめんなさい」

そんな二人をたしなめる朝夜。

すっかりお姉さんが板についてきました。

と言つか巷では猫耳堂の店主は朝夜になっているのを僕は知らなかった。

「それで孟徳殿、僕に急ぎの用とは何ですか？」

僕は魏の屋敷を訪れていた。

「ええ。少し頼みたい事があるのよ」

玉座に座った曹操がそう切り出した。

「貴女の知恵を借りたいのよ」

「ほほう。知恵、ですか……………」

「そうよ。塩の配分についてよ」

ふむ。確か魏は横長の国、塩が国全土に行き届かない、とそういうことかな。

「どうしても海側の地方に偏ってしまうのよ」

「まあ、そうでしょうね」

塩は海から取れる。そこから国に流していけば内陸にまでは行き渡らない、か。

「一刀にも意見を聞いたのだけどね……………」

「ふむ。海の幸と山の幸を物々交換される場を設けては？そうすれば内陸にも海の幸と共に塩も渡るのは？」

「それは一刀も言っていたわ。でも小角、山の幸は兎も角、海の幸がそれほど保つと思う？」

ああ。腐るか。冬ならまだ知らず、夏なら確実に腐るな。

「一刀が言うには天の国には保存させるための“どらいあいす”なるものがあるそうだけど、どうも一刀自身よく知らないらしくてね。こう白い煙のようなものが出てるそうなのだけど……………」

「煙じゃなくて水蒸気ですね」

「……………は？」

「湯気みたいなものです。あれは熱せられた水が気体になるものですが、あれは逆に空気を冷やして微粒な水滴にするから可視できるんですよ」

まあそれだけでは説明としては不十分だけど。まあ二酸化炭素とかの説明はいいよね。

でも確かドライアイスって二酸化炭素を高圧力で圧縮するだけか？まあ無理だな。

「……………」

「ん？どうかしましたか、孟徳殿？」

「貴女、知っているの？そのどらいあいのこと……………」

「……………。イエ、ゼンゼン」

「そこで嘔吐の意味が分からないわよ……………」

「まあでも製造は困難ですよ？それこそごその神仙に頼むしか」

「ウチの技術力をなめないでちょうだい。真桜にその製造法を伝えなさい」

ああ。確かに李典なら出来そうだな。カメラまで作ってたし。

「まあ伝えておきましょう。それとそれが出来るまでの打開策としてなら、香辛料との物々交換なんてどうですか？」

「香辛料？」

「はい。内陸にしかない香辛料と塩の交換率をこちらで操作すれば商人たちが群がるでしょうからそれで今は手を打つのも一つかと……………」

「ふむ。確かにそれも一つの手ね。いいわ、桂花たちに話してみま

しょう」

「はい。それではお代の方を……」

「は？お代？」

「まさか曹孟徳ともあるうお方がただで人の意見を取ろうなんて思  
つてないですよね？」

僕は笑みを浮かべる。久しくしてなかった月のような笑みを。

「……ふっ。随分な言いようね。良いわよ、別に。貴女の望む報奨  
を与えましょう」

ふふふ。かかりましたね。

「ではこれを……」

僕は懐から一組の猫耳を取り出す。

「……それがどうしたの？」

「これを孟徳殿に付けてもらおうかと」

「なッ！？何故、私がそのような……」

「報奨として」

「くっ」

「あ、カメラも用意してもらえますか？」

「貴女、後で覚えときなさいよ」

「なにを言ってるんですか。これくらいで国が富むのなら安いものですよ、はは」

そうして僕の独壇場、撮影会が開催された。

ほくほく。にやにや

「なにしてんのさ、旦那。気持ち悪いよ」

「いや、やはりツンとした表情が猫耳を引き立たせますよね」

僕は現像した写真を見ながらニヤつく。

さて次は誰を引き込みましょうか。

……フフフ。

あ。そう言えば余談ですが、ドライアイス出来たみたいですよ。

なんでも漢女さんに手伝ってもらったとか。

うん。そう簡単には高圧力をかけることができるものでしょうか？

まあ今はまだ試作段階で本腰を入れるのはまだ先のことですね。

2話 八チミツとモフモフを……

「お買い物 お買い物」

僕はただいま、材料の買い出しに出ています。

え？何のかつて？

そりゃ、至高の猫耳のですよ。最近、都の商人の質も上がりましたし、おそらく良い品が流れてきてるはずなんですよね。

あはっ。うれしいなあ。

「お。猫耳堂の旦那じゃないか、寄ってかないかい？」

町を歩くと店の中から声をかけられる。

「あ、いえ、お構いなく。また後で寄らせてもらいますね」

「おつよ」

僕は主人に断つて、市場へ足を進める。

「ふふうん、ふふ。ふうん」

鼻唄を口ずさみながら僕は市を回る。

「おつ、この布なんか中々。おおつ、あちらも捨てがたい」

「あれ、兄さんやないの？」

「あ、ほんとうなの。おい、小角さん、なの」

僕が物色しているとなにやら声をかけられた。

「おや、曼成殿に文則殿？」

僕が振り返ると李典と于禁がそこにいた。

それと……………。

「こら、沙和、真桜。まだ警羅の途中だぞ」

後から楽進と北郷がやって来た。

「おやおや、文謙殿はこのような一介の商人なんぞに話しかけることはお嫌なのですか？オヨヨ……」

袖で目元を覆う僕。

「え？あ、いえ、決してそのようなことは……」

あたふた戸惑う楽進。

「……ほ、本当ですか？」

「はい。本当です」

「じゃあ猫耳を付けてくださいッ」

僕、100%笑顔。

「……へ？」

「そう言えば僕、あれ以来文謙殿が付けてるの見たことないんですよ。ですから、はい、どうぞ」

僕は猫耳を取りだし、渡す。

「もちろん、語尾には“にゃ”を」

「え、え？何故、そう言った話に……………」

「ねえ、御遣い殿も見たいですよ？文謙殿の猫耳？」

「もちろんッ」

「即答やわ」

「即答だったの」

僕と北郷は固く握手する。

若干、李典と于禁が引き気味だったが気にしない。

『さあ文謙殿（凧）、猫耳を』

「……………ッ。あ、ええと。あつ、隊長、あそこで人が倒れてますよ。何かあったのかもいきましよう」

「逃げたな」

「逃げたの」

そう言うと楽進は走っていった。

まあ仕方ありませんね。

しかし、これで逃げれたと思ったら大間違いですよ？ふふ、ふふふ。

それにしてもこんな平和な世に行き倒れですか……………。

少し興味がありますね。行ってみますか。

おや？あれは。

「もぐもぐもぐ」

「はむはむはむ」

ところ変わって飯処。

「どんだけ腹減ってたんや」

「スゴい食欲なの」

この場には北郷隊の三人と北郷、僕、そして……。

「でなんであんなところに倒れてたんだ、二人とも？」

袁術と張勳が居た。

あ、食べてるときに話しかけては……………。

「うぎゃああー!!」

ああ。案の定、口にもものを入れたまま喋った二人に食べ物をつき出される北郷。

「ぎゃああー目に、目に唐辛子がツ!?!」

「た、隊長ツ!?!」

「だ、大丈夫なの!?!」

楽進と于禁に介抱される北郷くん。

「大変ですね、御遣い殿も。もぐもぐ」

「てかなんで兄さんも食べてんねん」

ん、何かおかしかったですか？

「んっ!?!んんーツ!?!」

あ、今度は袁術たちが喉にものを詰まらせた。

ははは。面白い。

「兄さんも笑つとらんで手伝つてや」

とまあこんなことがあります。

なんやかんやで袁術たちは北郷が保護という形に収まって、よかったですよ。

……タダ飯、食えて。

「おや、あれは公路殿？」

僕がサボ……散歩をしていると物陰に隠れた袁術を見つける。

「公路殿、お一人ですか？」

「うみゃッ!? な、なんじゃ、小角かや。驚かせるでない」

「それは失礼を。それで何を？」

「いや、妾は散歩をしておったのじゃが……」

そう言って視線を前に向ける。そこには……。

「伯符殿？」

孫策と周瑜が買い物でもしているのか、店を見て回っていた。

「そ、孫策ッ!?!?……がくがくぶるぶるがくがくぶるぶる」

おお。小さな体をぶるぶると。

抱きしめたい。

「うん?どうしたのじゃ、小角?」

「……いえ、何も」

「うむ、そうか。……孫策もどこかへ行ったようじゃな。では妾はもう行くぞよ」

パタパタと去っていく袁術。

「ああもう。お嬢様、可愛いですね」

「って貴女、居たんですか?」

「お嬢様のいるところに私がいるところですよ」

後ろから現れた張勳が言う。

「それなら一緒に居ればいいじゃないですか」

「それじゃあ、一人で震えているお嬢様が見れないじゃないですか」

「……………さいですか」

「可愛いかったですよね、お嬢様？」

「それは否定しませんが……………」

歪んでいますね。

「何か失礼なこと考えませんでしたか？」

「それも否定しません」

「そうですね。それでは私はお嬢様の後をつけなきやいけませんから」

そういうと張勳は袁術をこそこそと追いかけ始めた。

ふむ……………。

「でなんでついて来るんですか？」

「暇ですから」

物陰から袁術を張勳と共に見る。

「ちょっとあまり近づかないで下さいよ」

「狭いんですから。仕方ありませんよ」

「もう。変なところ触らないで下さいよ」

「あの、僕、貴女と同性ですからね？」

「私は男じゃありませんよッ!？」

「いえ、僕が女性なんですけど……」

「ええええ!？」

「ちょっと、声が大きいですって」

「……ん？七乃？」

こちらの声に気がついた袁術がキョロキョロと周りを見渡す。

僕は身を隠す。

「気のせいかな？」

袁術は気に留めずにまた歩き出した。

「ふう。気づかれてませんね」

僕は胸を一撫で。

「ちょ、ちょっともう放して下さいよ〜」

「ああ、すみません」

僕は腰に回していた手を放す。

「もう、女性にいきなり抱きつくなんて何を考えているんですか」

「だから僕も女性……………」

「あ、お嬢様が行っちゃいますよ?」

はあ。聞いてない。

「ああ! みつなのじゃッ!??」

「おおっ。もーかくではないか」

どうやら孟獲となにやら会話をしている袁術。

「ふーむ。美以ちゃんと何を話しているんですかね。小角さん聞い  
え……………って何してるんですかッ」

「おっと。つつい猫耳につられて出ていくところでした」

フラフラと出ていこうとした僕を引き留める張勳。

「小角さんってもしかして変態さんですか？」

「ええ」

変態という名の紳士です。あれ？女性だから淑女かな。

「ええと。そこまで清々しく肯定されては弄り甲斐もありませんよ」

「おや。どうやらどこかに遊びに行くようですよ？早くついていきましよう」

「なんだか一刀さんと同じ人種のような気がします……」

その後、美以たちは南蛮3娘たちと合流し、日が暮れるまで遊んでいた。

「はあくん。泥だらけなお嬢様も可愛いですね〜小角さん」

「いや、そこまで狂信じゃないもので。と言いますか意外ですね」

「はい？何がですか？」

「いえ。もっと過保護な人かと思っていましたが……」

まあ十分ストーカーしてる時点で過保護だが。

「いえ、お嬢様は賢い方ですから、私が過保護にしくなくてもいいんですよ。」

そういう張勳の顔は子を見守る母のように慈愛に満ちていた。

「で本音は？」

「ああやって荒波に揉まれるお嬢様が可愛いじゃないですか。」

今度は黒い笑顔だった。

「ま、それもそれで一興。ではもうそろそろ限界ですので……」

「えっ？何がで」

張勳が聞き返す前に僕は動いていた。

「ううッ!? な、なんにゃ? 急に悪寒が……………」

「フフフ」

「だいおー、後ろによ」

「後ろ……………? にゃ、にゃにゃ、しょーかくッ!?!?」

「フフフ。久し振りのモフモフ……………。今日は誰も止める人はいませんよ?」

では……………いただきます。

モフモフ。フワフワ。ぬくぬく。

あははは。ふははは。ぬははは。

……………フヒ。

「な、なんなのじゃ!?!?」

「たいへんなのにゃ」

「たいへんにょ」

「たいへんなのにゃ〜」

袁術、南蛮三娘が孟獲の後ろに現れた小角に困惑する。

「た、大変なのかの？」

「どちらかと言えば変態なんじゃないですか？」

「おお！七乃、どうしたのじゃ？」

「いや、偶然散歩してたら、偶然お嬢様を見つけたんですよ偶然ですよね」

「そうなのか？それは偶然じゃの」

「はい。それじゃあ帰りましょうか、お嬢様」

「うむ」

張勳と袁術は手を繋いで帰っていく。

仲の良い姉妹のように、親子のように。

「ま、待つのにゃー。みいたちを置いてく」

「ふふふ。では僕と一緒に遊びましょうね」

『じゃーっ！っ？』

その後、城の中庭にぐったりとした孟獲たちが発見された。

## 2話　ハチミツとモフモフを……（後書き）

こんな感じで猫耳帝国建国を頑張ります。

基本的に更新は不定期です。

それではまた次回。

ご意見、ご感想お待ちしております。

3話 八百一？

本って素晴らしいですよね。

えっ？いきなり、なに言ってるんだって？

いやいや、見てくださいよ、これ。

猫耳大全なる本があつたんですよ。

いや、マジこれ神ッ!？

古本市で見つけた時は運命だと思いましたね、これ。

これを運命と言わずして何を……………

10分程続くので割愛。

「それにしても本の市場も大きくなりつつありますね」

本の需要が増えつつあるみたいですね。

ふむ。娯楽の需要が増えるのは国が豊かな証拠ですね。

まあ、ウチも試験的に本を取り扱っていますけど、この分なら本格的に取り組むのも悪くないでしょうね。

「ん？あれは……………」

僕は古本屋を出口である少女を見つける。

「……………キヨロキヨロ。うん、誰も居ないよね」

「うむ。確かに誰もいませんね」

「はわわッ!?!」

僕は少女の後ろに回り込み、少女と同じように周りを見渡す。

「しょ、しょ、小角さんッ!?!どうしてここにッ!?!」

「孔明殿と同じですよ。本を買いに来たのです」

「そ、そうですよね……………」

僕は諸葛亮が大事そうに持つ袋を見て、言う。

「そ、それではひつれいしましゅ」

ダツと僕から離れて走り出そうとした諸葛亮だったが……。

バサツ。

勢い余って袋を落としてしまった。

「はわわッ!？」

慌てた様子で拾う諸葛亮。

「……………み、見ましたか？」

顔を真っ赤にしてこちらを上目使いで見上げる諸葛亮。

お持ち帰り、オッケーですか？

「はい？何をですか？」

「い、いえ。見てないならいいんでしゅ。それでは」

ぺこりとお辞儀して今度こそ帰ろうとするが……………。

「それにしても孔明殿は過激な趣味をお持ちですね」

「はわわッ!？やっぱり見たんじゃないですか……!」

そう簡単に逃がすかこんな萌生物。

頭、腐敗中。

「いやはや。蜀の頭脳は違つのですね、うんうん」

「い、いや。ちが、違つんですッ!?これは、その……………そうッ!  
雛里ちゃん!?雛里ちゃんに頼まれたんです!!」

「へっくちッ」

「雛里ちゃん、大丈夫?風邪かな?」

「いえ。大丈夫です。ご心配かけてすみません、桃香様」

「……………」

「あは、あはは」

乾いた笑いを浮かべる諸葛亮。

「ま、そう言うことにしますか。そうだ、孔明殿少しお時間よろしいですか？」

「え？いや、まだ仕事が……………」

と言つてはいるが手元の袋を見ているのであまり意味が無いのだが。

「いえ。そこまでお時間取らせませんよ。少し店に寄ってもらえればそれで……………」

「店、ですか？」

「はい。それでは行きましょう」

僕はチョイツと諸葛亮から袋を引いたくる。

「はわッ！？小角さん、何をッ!？」

「いえ。荷物は僕が持ちますよ」

僕は諸葛亮の返事を聞かず、歩き出す。

そして店に着くまで諸葛亮のはわわっぷりを堪能しました。

「今、帰りましたよ」

僕は暖簾を潜る（くぐる）と。

「おっそーいッ!？」

お約束な朝夜の蹴りをいただきました。

クルクル……………ガコッ!!

「ふぐっ」

後、何故か板まで飛んできました。

『油断禁物』

何故か板をブーメラン代わりにした曼珠がキメ顔で言う。

え？元ネタが分からない？

偽な物語を読むといいよ？

はい、閑話休題。

「何をするんですか、曼珠。目に入ったらどうするんですか!？」

『大丈夫。ちゃんと練習したから、命中率は高い』

「ほほづ。ちなみにどねくらいですか？」

『10回と8回は……………』

おお、8割とは中々。

『外す』

「人に向けて使うの禁止ッ!？」

なに、しれつと使ってんのよ、この子。危なすぎるわッ。

『大丈夫。么戯なら外さない』

「なんだ、それなら良かった……………つてなるかいッ!？」

「ようぎ、ようぎ」

僕が曼珠にノリツッコミしていると沙華が袖を引つ張ってきた。

「……………私も武器あれほしい」

「……………駄目です」

「ええー。なんで、なんで?ようしもまんじゅも持ってる」

ぶくうと頬を膨らませる沙華。

「なんでも、ですよ。全く、二人の悪影響ですよ」

「……………（ぼけー）」

あ、諸葛亮のこと忘れてた。

すっかりほったらかしにしていた諸葛亮を招く。

「さあ、こちらへどうぞ、孔明殿。少々ここでお待ちを……………」

近くの椅子へ通して、僕は仕事場へ向かう。

「……………つと。お待たせしました」

僕は袋を一包み抱えて戻ってきた。

「ええと、これは……………？」

「本です」

僕がそう言つと諸葛亮は、本？、と首を傾げる。

「中をご覧になれば分かりますよ……………」

「中を……………（ボンッ）。……………」

中を確認すると顔を茹でダコみたいにする諸葛亮。

「はわわわ。こ、これは………!？」

顔を真っ赤にしながらも渡された本を食い入るように見る諸葛亮。

「こ、これは升郭<sup>ひょうかく</sup>先生の最新本ツ!? まだ市場には出回ってないはずなのにッ」

「たまたまツテで手に入りましたからね。先ほど拝見したところ、同じ作者の物を持っていましたから、もしよければと思ひまして…

…」

「いいんですかッ!？」

目をキラキラ輝かせる諸葛亮。

「ええ。熱心な読者の手に渡るのがこの本の本望でしょうし………」

「上手くないよ、旦那」

余計なことと言わないの。

「あ、ありがとうございます」

お礼を言って店を出ていく諸葛亮。

「あ、朱里ちゃん、おかえり」

「ただいま、雛里ちゃん。見て見て、これ」

「へ？……これって。升郭先生の最新作ッ！？どうしたの、これ？」

「小角さんに貰ったんだ」

「そうなんだ。あの人の店はなんでもあるね。……あれ、でもこの本おかしくない？」

「え、どこが？」

諸葛亮から本を受け取り、見ていた鳳統が言う。

「だってこれ出版許可の印が打たれてないよ？」

「え？でも中身は確かに升郭先生のものだよね」

「うん。だとすると、これ……。原本なんじゃ……」

「え？でも原本は作者本人が持って……」

「え？」

「旦那、良かったのかよ？」

「何がですか、朝夜」

「あれ、あげちゃって。まだ出版許可出てないじゃん」

「いいんじゃないですか？“自分の物”を贈るくらい」

「でも原本あげたら増刷できないじゃん」

「また書けばいいんですよ。どうせ、手遊び程度の物ですから……」

「そのくせ、ウチで一番の売り上げの本だよ。旦那は何でも出来るんだね」

「何でもは出来ませんよ。出来ることだけです」

4話 とある猫耳堂店主の1日

朝。

「……………ふうん」

鳥の囀り(さえずり)が聞こえた。

「……………あな」

ん？

今、誰かの声が聞こえた。

「ふん、あな……………」

僕のお腹辺りに重みを感じた。

「ふん、あな……………おねる」

覚醒前の頭が揺さぶられる。

誰かは知らないけど、僕を起こすのは……………。

「おきない。……………なら」

「……………うるさッ！？」

文句を言おうとしたその時、僕の口はなにか柔らかいもので塞がれた。

柔らかい、なにか……………？

「なッ！？何してるんですか？」

僕、強制覚醒。

「おはよう、ようぎ」

「ああ、おはよう、沙華……………って違う！？沙華、い、今、何をッ！？」

いつも通りに挨拶する沙華に僕もノリッコミしてしまった。

「……………？ようぎ、あそ」

「ああ。起こしに来てくれたのは礼を言っけど……………なんて起こし方を」

僕の視線は艶々とした唇に行く。

いやいや。流石にそれは僕の考えすぎだろ。

「まあいいか。起きますよ、起きます」

眠気もぶっ飛んだよ、全く。

「おはよございませす」

「あれ？旦那、早いなだね今日。なにか予定でもあるの？」

「いや、沙華に起こされて……」

「え、沙華ちゃんが？」

と朝夜が僕の横にいる沙華を見る。

「起こしたのになんともないね、沙華ちゃん」

「まあ、あれだけ強烈に起こされれば眠気も吹き飛ぶつてものですよ、全く」

やれやれと頭を搔く。

いつの間にやら沙華が遠くの存在に。

『沙華』

曼珠が沙華に近づいてくる。

『どうだった？』

「うん。せいじつ」

『じゃあ、今度から私もそれで起こそう』

なにやら不穏な会話だったが、気にしたらアウトだよ、多分。

「……………？まあいいや。じゃあ、ちよつどいいから手伝ってよ、旦那」

「ん？忙しいのですか？」

「いや、旦那、店主なんだからたまには店に出てよ」

「朝夜、こっちの伝票は終わりましたよ。沙華、そっちの納品は少し早めにしてください。曼珠、項姐の所にこないだの件について報告をするように文を出しといてください。後は……………」

「俺、初めてあの人が働いてるところ見たぜ」

「ああ。俺もだ」

悲しきかな、店員はもうダメだ。

「あなたたちも働きなさいよ」

「はい、代理ッ!？」

「代理の為なら2徹でも3徹でも」

やっぱり、店員はもうダメだ。

朝夜の言葉に嬉々として答える店員たちに頭を悩ませる僕。

「おお。珍しく小角さんが働いていますね」

「こら、風、失礼ですよ」

そんな中を程イクと郭嘉がご来店。

「あ、程イクさん、郭嘉さん、いらっしやいませ」

『いらっしやいませ』

「いらっしやいませ」

朝夜たちが歓迎する。

「どつもー」

「お邪魔します」

「どうも。仲徳殿、奉孝殿、お久しぶりですね。今日はなにかお探しですか？」

「いえいえ。今日は華琳様のお使いで来ました」

僕が用件を尋ねると、郭嘉がそう答える。

「孟徳殿の？」

「はい。今日の昼過ぎに屋敷へお越しになるようにと……。大丈夫ですか？」

「え？まあいいですけど……。では昼過ぎに訪ねさせていただきますね」

「では風のお役目は終わりましたし、ここでちょっと休憩していくとしますかねー」

「ちよ、風！？」

ポストと僕の膝の上に座る程イク。

「ちょっと、華琳様に報告しにいかなくていいの？」

「ぐうー」

「寝るなッ！」

「おお！？ついつい小角さんの膝が心地よくて……。それに華琳様なら返事も大方予想していたでしょうし、大丈夫なのですよー」  
そういつてなお深く座り直す程イク。

いや、仕事出来ないんだけど。

後、朝夜の視線が痛い。

「そして曼珠、構えるなッ！！」

『チッ』

死ねばいいのに×3

え？何も聞こえませんでしたよ？

あーあー聞こえないーいー、聞こえないーいー。

「ふふ。小角さんの周りは賑やかですなー」

昼。

さて、そろそろ魏の屋敷に行かなくてはいけないですね。

「それじゃあ、朝夜。後は頼みましたよ」

「はい。いつてらっしゃーい」

せめてこつちを見て、言ってほしい。

算盤とにらめっこ中な朝夜に見送られて僕は魏の屋敷へ向かう。

おや？あれは……。

魏の屋敷へ向かう途中、北郷と

周泰？

いや、正確に描写するなら、猫耳、尻尾を生やした周泰だ。

そんな周泰が北郷に手を引かれて走っていく様を見た。

……………ハッ！一瞬、ベブンが見えた。

いやいや。それよりもこれは間近で見なくては……………。

僕は二人を追いかけようとした時。

「……………おろ？」

あれ？足が動かない？なして？

僕の足が地面に縫いつけられたかのように動かない。

ああーッ！？猫耳がー、猫耳周泰ちゃんがー！？

なんだ、この現象はッ！？まさか、また于吉の……………。

なにやら天の意思で僕は二人を見失った。

……………orz。

「ちょっと、本当にこんなんで正体バレないんでしょうね？」

「はいー。星ちゃんに聞きましたから間違いないのですよー」

「いや、多分、間違いだらけかと……………」

「あッ、小角が来たわよ。行くならいかないと」

「ああもつッ！？行くわよッ」

ああ。本当に惜しいことをしました。

まさか僕はチキンだったのでしょうか？

とそんなことを考えていると。

「そ、その商人、待ちなさいッ!？」

横道からなにやら小さな集団がぞろぞろと。

「……………どうかしましたか、文若殿？」

僕は何やら蝶を模したような仮面をつけた荀イクに声をかけた。

「ちょ、ちょっとッ。すぐバレてるじゃないッ!？」

と隣にいた程イクにあたる荀イク。

「おお!この変装を見破るとは流石は小角さんですねー」

え?それ変装だったんですか!?

それは悪いことをしました。僕としてはそんな面白いことには乗らないわけにはいかないのですが……………。

「それではテイク2で……………」

「ていくつー？なに言ってるのよ、2つに決まってるじゃない」

ん？……………ああ。手、いくつ、ですか。

「いえ。こちらの話でした。それで皆さまお揃いで一体どうしたのですか？」

僕は改めて僕の前に立ちふさがる娘たちを見る。

荀イクに程イク、諸葛亮に鳳統、それに孫尚香。

何かが足りない面々。何がとは言及しませんよ？

「貴女、貧乳党に入らない？」

「は？」

僕の思考が一時停止した。

ひんにゆうとう？なにそれ、美味しいの？

いやいや。戻ってこい、僕。

「すみません。僕はそういった宗教勧誘は……………」

「ち、違うわよッ！？アンタ、弁論大会のこと知らないの？」

「うん？弁論、大会？」

ああ。なんか聞いたことあるような、ないような？

「私たちはそこで貧乳党として巨乳禁止令を提唱するわ。アンタもそれに参加しなさいって言ってるのよ」

ああ〜……………どっぴんぐとっ？

「だからッ！？」……………」

少女説明中。

「ふむ。おおむね分かりました。それでは僕はこれで……………」

「ちよっとなんでそうなるのよッ！？」

「いや、僕、孟徳殿に呼ばれてるんですよ」

「知らないわよ、アンタのことなんて」

なんやかんや、のらりくらりと逃げて……………。

「すみません。遅れました」

僕は魏の屋敷の謁見の間にいた。

「構わないわ。急に呼び出したのこっちなだから」

「ありがとうございます。それで用と言つのは？」

「ええ。小角、貴女弁論大会のことは知っているかしら？」

「ええ。……え？もしかして孟徳殿も貧にゆ」

「何か言つたかしら？（ニコツ）」

「いえ。何も……」

だから鎌を構えるのは止めていただきたくて、曹操さん。

マジ、刃が当たってる、当たってるからッ！？

「はあー。そのことでもあるんだけどね。貴女、それに出てくれな  
いかしら？」

勿論、桂花たちとは別でね、と付け加える曹操。

「ん？何故、僕が出るのでしょうか？」

「今、弁論大会への参加が決まっているのは、桂花たちの貧乳党、  
それと亞莎たちの三時のおやつはゴマ団子党、そして美羽の妾に1  
日三回八チミツを貢ぐ党なのよ。……分かるわよね、この意味」

「ああ」

「これじゃあ、ろくな弁論大会にならないわよ」

それで僕にお鉢が回ってきたと……………。

「ふむ。考えてみます」

「そう。頼むわよ、本当に」

ため息をつく曹操。

「あ、そうね。小角、昼はもう済ませたかしら？」

「いえ、まだです」

「なら今から流琉に作らせるから食べていきなさい」

「ではお言葉に甘えさせていただきます」

夕方。

「今、帰りましたよ」

「あ、お帰り、旦那」

僕が帰ってくるのと店には朝夜と……………。

「やっほー小角さん」

馬岱がいた。

「お久しぶり、小角さん」

ピョンツと飛んで僕の方へ歩いてくる馬岱。

「何か僕に用でしたか？」

「ううん。遊びに来たの」

「そうでしたか。すみませんね、待たせてしまいましたね」

「ううん。いいの。いい話も聞けたし……………ニシシ」

馬岱は曼珠たちを見る。

『……………』

「……………」

あ、そっぽを向く二人。

「おい、その二人。何を話したのですか？」

『他愛もない昔話』

「よつぎは気にしないでいい」

ほほう。後で詳しく聞きましょうか？

「ああ！たんぽぽ、ここにいたのかッ」

「げっ！お姉様ッ!?!」

鬼のような形相で馬超が暖簾をくぐる。

「お前、鍛練をまたサボったそうじゃないか。愛紗が怒ってたぞ」

「うげー」

「さあ、さっさと帰るぞ」

馬岱の首を掴んで、引っ張っていく馬超。

「ええと……………」

『またのお越しをお待ちしています』

四人で見送る。

夜。

「…………ふあ〜」

陽も落ちて、夜がふける頃。

作業場で僕は算盤を弾く。

眼鏡を上げて、一揉み。

「やっぱり、まだしてたんだ」

「おや、朝夜。まだ起きてたのですか？」

「それは旦那もでしょう？」

そう言って朝夜が部屋に入ってくる。

「…………手伝つよ」

「…………ん」

僕は素直に言葉に甘える。

なんだか僕も丸くなったなあ、と思ってみたり。

パチパチ、すらすら。

珠を弾く音と筆を走らせる音だけが部屋に響く。

『つまらない』

「もっと、桃色なてんかいをきたい」

「え？……曼珠ちゃん？沙華ちゃん？」

「貴女たちもまだ起きてたのですか……」

「やしよく、持ってきた」

お盆に軽い食事を乗せて、二人が部屋に入ってきた。

あと沙華さん、桃色な展開って……。

この店のある本宅には僕と朝夜の他に曼珠たち二人も住んでいる。

店で働いている中には出稼ぎの人もいるから、店に近い位置に別宅として従業員たちの寮的なものがあるが二人はここに住むことを選んだ。

まあ部屋も余ってるから別に構わないのだけれど。

『少し休憩するといいい』

そう言つて人数分のお茶を用意する曼珠。

そして四人で夜食を食べる。

うむ。こうしているとなんだか……………。

『家族みたい?』

「顔に出てましたか?」

「よづぎはわかりやすい」

二人は顔を見合わせて頷き合う。

「それにアタイたちは旦那とは付き合い長いし、それくらい分かる  
な」

朝夜にまで言われてしまいました。

僕は頬を解ほくしながら、少し照れ笑い。

まあ、こういうのもたまには悪くない。

『そして夜は……………』

「四人で……………」

「……………し、しっぱりと……………／／／／／」

二人に催促の目線に負けた朝夜。

「ふむ。それもたまには悪くない」

え？その後、どうしたかって？

それは秘密ですよ。

……………フフフ。

4話 とある猫耳堂店主の1日(後書き)

萌将伝の蒲公英が可愛い……。

ご意見、感想お待ちしております。

5話 パンチラ、それは魅惑の響き(前書き)

短め？

5話 パンチラ、それは魅惑の響き

ところはある城門の1つ。

「そうか。警羅に戻るのか」

「はいッス」

董卓軍の装束の兵と曹魏の装束の兵が会話していた。

「董の兄にはお世話になったッス」

「いや、お前も頑張れよ」

「はいッス。……………あ、あの方は!？」

魏の兵が何かに気づき声を上げる。

つられて董卓軍の兵も視線を追うと……………。

「おい。ご主人様を見かけなかったか？」

関羽がそこにいた。

「いや、見てないツス。董の兄はどうスツか？」

「いえ、自分は朝から居ますが見てません」

「そうか」

（やったー。あの関將軍と話せたぜ！）

（よく振ってくれたな）

（当たり前ツスよ）

「ん？なにが言ったか？」

「いいえ、なんでもありません」

「そうか。なら私はこれで」

「？よたしまいに市の東らな殿い遣御」

スルスルスル。

逆さ吊りに僕が降りてくる。

「なっ！？何をしているのだ、小角ツ！？」

「……よすでのたて見を合具損破の門」

「ん？何を言っているのだ、小角？」

クルリと回転する僕。

「あ、いえ、お気になさらずに。それはそうと御遣い殿なら東の市にいましたよ、雲長殿」

「そ、そうか。分かった、礼を言う」

そう言っつて関羽は東の市に向かった。

「で何してたんスカ、猫耳堂の旦那？」

「ん？ああ、門兵ご苦労様です。門の修繕を頼まれましたね。それで破損具合を調べていたのですよ」

「そ、そうなんスカ」

「手広くやっているのだな、猫耳堂は」

「はい。皆さまの朝のおかずから兵料までありとあらゆる物を取り揃えております、猫耳堂。勿論、夜のオカズもありますよ？」

ウへへと笑う僕。

「いつも使わせてもらってるッス」

「お前は……」

「そういう董の兄だって……」

「ち、違うぞ。俺はお嬢様の“しゃしん”をだな……」

「お二人ともウチのお得意様ですよー」

『……………』

二人とも目をそらす。

「それでは僕はこれで。調査も終わりましたから職人の調整にいかないと。それでは、門番頑張ってください」

「あ、はいッス」

「お疲れ様です」

僕は店に戻る。

「それにしても猫耳堂の旦那も変わった方だよな」

「そうッスね」

「あ、あのお方はツ!？」

董卓軍の兵が声を荒げる。

「絶対、話を振ってくれよ」

「わ、分かったツス」

「あ、あの〜……」

「はい。お嬢様、どうかなさいましたかツ!？」

次に現れたのはメイド姿の董卓だった。

「自分から話しかけてるじゃないツスカ」

「あのご主人様をお見かけしませんでしたか？」

「北郷様ですか？確か、北郷様なら……」

「東の市、ですよ」

『ツ!？』

再び現れた僕に驚く三人。

「猫耳堂の旦那ツ!？帰ったんじゃ……」

「ええまあ。忘れ物をしたので取りにきました」

「あ、小角さん、丁度よかったです。お茶の葉が切れそうなので追加お願いしてもいいですか？」

「ええ。構いませんよ、仲頼殿。それでは朝夜に伝えておきますので近日中にはお届けできると思います」

「ありがとうございます。それでは、門兵さんも頑張ってください」

「はっ！」

とととと東の市へ向かっていく董卓。

「それじゃあ僕も……それでは」

「いや、ホントに変わった人ツスね」

「全くだ」

「と言うか、北郷様以外で將軍の方たちと対等に話してるのって猫耳堂の旦那だけなんツスよね」

「そうだな。それを考えると凄い人なのかもしれんな」

「ふうー。思ったより時間がかかってしまいましたね。早く帰らないとまた朝夜に叱られてしまいますね」

僕は門から店に戻る途中。

「北っ郷おおお!!」

「ふぎゃッ!?!」

あ、北郷が飛んでる、跳ねてる、跳ねてる、滑って、跳ねてる。

おお、10点!

北郷の勇姿に満点をあげた。

コツコツ。コツコツ。コツコツ。

ふう、これでよし。

孔の大きさはこれぐらいだろ。

何を作っているかって？

いや、合法的？に女性のパンツを見れるベストスポットの作成ですよ。

おそらく、第一弾のアレはもうそろそろ見つかる頃ですからね。新しいのを一つ。

フフフ。こういった娯楽は秘密的な方が萌えるでしょ？

うむ？第一弾の方から物音が聞こえますね。なんですかね、見てきましようかね。

あ、北郷さんと兵士さんたちと……………関羽。

見つかったみたいだね。……………御愁傷様。

さて。僕は新たにベストスポットを……………。

「取り壊し始め」

僕が戻るとそこでは突貫工事が……。

「って。違ーうッ!? 何してるんですか、朝夜!」

「曼珠ちゃん、沙華ちゃん、犯人確保」

『了解』

「りようかい」

ガシツと僕の両脇を掴む二人。

「ちょッ!? え? なにこれ?」

「旦那、夜な夜などここに出かけると思ったらまた下らないものを作って……とりあえず話は後。とりあえず、それ壊しちゃって」

おお! とウチの女性従業員たちが手に持った槌で叩き壊し始めた。

「あぁーッ!? 僕のベストスポットがッ!」

『あぁーッ!』

その夜、奇妙な嘆きの声がこだました。

5話 パンチラ、それは魅惑の響き（後書き）

ご意見、ご感想、お待ちしております。

6話 程仲徳の猫耳堂日記（前書き）

今回は風視点です。

結構、難しいです。

では本編をどうぞ。

6話 程仲徳の猫耳堂日記

今日も楽しく生きてる役小角です。

弁論大会ですか……。

参加するのはやぶさかではありませんが、良い政策なども思い浮かばないのですよねー。

しかし、各国の有能な軍師が参加するのに僕が参加するのに意味があるのでしょうか？

確かに各派閥の名前がおかしいのは認めますが……。

それでも三国の頭脳たちですよ？そうそうおかしな策案を出すとは到底思えません……。。

え？なに？それが既に残念フラグ？

え？なにそれ、公孫贄のこと？それとも華なんとかさん？

まあ、とりあえず保留にしますか、まだ期限はありますし。

と言っわけで僕目線はこれで終わりー。

風は程仲徳。今日は1日暇をいただいて、小角さんのところに遊びに来ましたー。

相変わらず賑やかで、退屈しない店なのですよー。

お兄さんの周りも大概に騒がしいですけど、小角さんところも騒がしいですねー。

郢土ちゃんを筆頭に曼珠ちゃん、沙華ちゃんと小角さんの周りには小さな女の子が多いのですよー。

かと言う風もその一人だったり……。

「仲徳殿、面白いですか？」

「……ZZZZ」

「おや、お休みでしたか。これは失礼」

「うー。ここは起こすところですよ、小角さん」

「それは失礼」

風は今、小角さんの作業場の椅子に座って小角さんの作業を見ている。  
「ます。」

全く、相変わらず読めない人ですねー。

「それで仲徳殿、ただ見てるだけではつまらなくないですか？」

「いえいえ、風は楽しいですからお構いなくー」

「そうですね……」

そう言っただけでまた作業を始める小角さん。

現在、新作の猫耳を制作中なのですよ。

正直、風にはまだ“役小角”という人物がよく分からない。

この店は都でも五本の指に入るほどの大きさになっている。

三國同盟が結ばれてからそれほど時間が経ったわけでもないのにここ

まで上り詰めたのはかなりの手腕だと思う。

それでも店はそれほど忙しそうにしている様子がいつ来てもないのだ。

とはいえ普通の商家ほどには忙しそうに見える。

確かに郢土ちゃんや曼珠ちゃんたちは優秀だけど、それでもこれは異様に思える。

巷では郢土ちゃんの頑張りしか噂されてないが、おそらく小角さんが裏で、見えない所で押さえているのだろう、と風は思っている。

それを暴きたいと思うのは軍師としての性なのだろう。

「……………ッ!？」

「?……………どうかしたのですか、小角さん？」

急に作業の手を止めて、机のものを仕舞い始める小角さん。

「旦那、追加の伝票持ってきたよ」

仕舞い終わると郢土ちゃんが書簡をいくつか抱えて入ってきた。

「朝夜、ありがとうございます。そこに置いて下さい。こちらが終わったなら目を通しておきますね」

郢土が書簡を部屋に置き、出ていく。

「小角さんはサボるのも上手いんですねー」

「要領いいだけですよ」

再び、猫耳作業に取り組む小角さん。

それを風は見つめます。

時折、ニヤニヤと笑う小角さんは少し気味が悪いと思ったことは内緒ですよ？

コンコン。

「ん？」

今度は扉をのつくする音がした。

『幺戯、お客』

扉が少し開き、スツと板が出てきて示す。

おそらく、曼珠ちゃんだろう。

彼女は声が出せないから筆談で会話するのだ。

「お客さん？誰ですか？」

『曹操さま』

まるで質問されることが分かっていたかのように違う板が出てきて示す。

「孟徳殿？……今、行きますから客間に……」

「その必要はないわ」

と扉を開けて華琳さまが入ってきた。

「あら、風。ここに居たの」

「どうもー」

風は華琳さまに挨拶する。

「どうも、孟徳殿。作業中ですのでこの体勢から失礼します」

「いいわ。突然訪問したのは私の方なのだから」

華琳さまは部屋に入り、手頃な椅子を机の前に移動させて座る。

「それでこの度は何のご用でしょうか？」

「用は2つよ。1つはこの間の弁論大会への参加のことよ」

「ああ、それですか……」

「ええ。参加の手続きはこちらで済ませておいたから」

「それはお手数を……………あれ？僕参加を了承した覚えがないのですが」

「ええ、私も了解を得た覚えはないわ」

「……………」

「……………」

無言の二人。

「……………あのもしかしてこの前の撮影会のこと根に持っていたりしますか、孟徳殿？」

「そんなことないわ。私は霸王よ？そんな小さなことをいつまでもネチネチと根に持ったりしないわ」

「そ、そうですね……………」

凄くいい笑顔で言う華琳さま。

「はあー。……………分かりました。何か政策を練っておきます」

「そう。ありがとう。それで2つ目はこの案件に関して意見がほしいのだけれど」

と華琳さまが書簡を取り出す。

「ふむ？これですか……………別に構いませんよ？」

あ、小角さんが悪い笑顔をしていますねー。

「そうそれは良かったわ。良き友人として意見を聞きたいのよ。良き友人として、ね」

うん？何か引つ掛かる言い方ですね、これは。

「良き、友人として、ですか？」

「ええ、良き友人として、よ」

「報酬は……………？」

「あら、貴女は友人に助言をするのにも対価を求めるのかしら？」

「……………」

「……………」

「……………極めて了解しました」

あ、小角さんが根負けした。

「フフフ」

勝ち誇った顔の華琳さま。

小角さんには時折、華琳さまみたいに政の案件を見せにくる人が来る。

お兄さんの発想も中々だが、なにぶん多忙な身なお兄さん。それで小角さんにお鉢が回ってくるのだ。

「それでは僕の良き友人たる孟徳殿にこの猫耳をつけていただきた

」

「嫌よ

」

「……………」

あ、仕舞った。

「で、どういった案件ですか？」

「治水工事についてなのだけれど……………」

「それで仲徳殿、もう外は真っ暗ですよ？」

夜もふけてきたころ、小角さんは眼鏡を外して言う。

「そうですねー」

「いや、そうですねー、じゃなくてですね。屋敷までお送りしましたよ。ようか？」

「いえいえ、それには及ばないのですよ。今日はここに泊まっていますからー」

「……はい？」

小角さんがこちらをマジマジと見てきます。

「ええと、泊まっていかれるのは構わないですけど。屋敷には連絡を……」

「大丈夫ですよ。出掛けるときに言っておきましたから」

「………そうですか。あれですか？魏の方々は僕を弄るのが生き甲斐なのですか？」

「さあ？風にはなんのことやらー」

口を隠して笑ってみる。

「ああ、でもウチは商家ですからなにかと物騒かもしれませんよ？」

「またまた、何を言って」

カラカラカラ。

風が否定の言葉を言おうとした時、板を打ち合わせた音がした。

「おや、どうやら歓迎されないお客様が来たようですね」

少し時間は戻って店内。

「ヘッヘッヘ。ここが都でも有数の大店だな。しかも夜はガキが三人とヘタレな主人しか居ねえなんて優良物件だぜ」

「アニキ、さつさと盗んじまいますよっぜ」

「だな。おい、デク」

三人組の泥棒は金目の物を物色し始めた。

『幺戯の店に盗みに入るなんて』

「いのちしらず」

「だ、誰だッ!？」

そこには明かりを持った曼珠たちがいた。

「なんだ、ガキじゃねえか。おい、チビ縛っとけ」

「へい。さあ、大人しくしてれば痛くはしねえよ」

チビが曼珠たちに近づくと……………。

『警告』

「いますぐ、よつぎの店からでていく」

と沙華が手に構えたのは……………柄杓ひしゃくだった。

「はあ？何を言っ カハッ」

チビが何かを言う前に倒れ伏した。

お忘れかも知れないが沙華は元紗祈で、曼珠とは違い、諜報ではなく実戦隊に属していた。

つまり、常に死線に立ち続けて、あまつさえ生き残っているのだ。

たかが泥棒風情を相手取るのに剣だろつが柄杓だろつが変わらないのだ。

「なッ！？おい、デク、ガキどもを取り押さえろ」

「わ、分かつたんだな」

チビがやられたのを見て、次にデクを差し向ける。だが。

「アンタら、都に来て日が浅いでしょ？まさか旦那の店に手を出す輩がまだいたとはね」

店の奥から鄧士が現れる。しかし手には何も持つてはいなかった。

「チツ。また1人増えやがった。デク構わねえやつちまいな」

「ん、んだ」

「遅いよ」

デクが返事をしたと同時に鄧士がデクの懐に入り込む。そして鳩尾に一発。相手が怯んで屈んだところに側頭部に強烈な蹴りが炸裂し、デクは沈む。

「さて、あと1人だね」

「ヒイヒイ。な、なんなんだ、あのガキどもは滅茶苦茶強えじゃねえか。くそ、こうなったら人質を取って……ん？明かりがついてやがる。へッへッへ、好都合だぜ」

泥棒は明かりのついた作業場へ乱雑に入る。

「大人しく人質になりやがあああああああああああ！！」

風はありのまま話すと……………。

突然入ってきた泥棒と思われる人が作業場に三歩入ったところで床が抜けて、落ちていった。さらに天井から金だらいが降ってきて、そのまま穴に吸い込まれていった。

ゴンツと痛い音がした。

「ほら、なにかと物騒ですよ、ウチは」

「いや、かなり安全だと思いますね」

おそらく都で一番安全なのはお兄さんのお屋敷ですが、それを除けばこのお店が一番となるだろうと風は思った。

三国を混乱させた元紗祈の二人に、三国の武将たちから武を教授した鄢土ちゃん。それにこの小角さんだ。

誰も考えつかない、いや考えついても実行しない策を平気で使う奇想天外なこの人がいるのだ。

一軍隊を使つてもこの店を落とすのは不可能ですね。

「さて、この人たちどうしますかね……」

風たちの前には縄でぐるぐる巻きにされた三人組がいた。

『じゃあまず全身の毛を抜いて』

「つめをはいで」

『皮を剥い』

「はい、そこまですよ、二人とも」

なにやら怖いことを言い出した二人を小角さんがポンポンと頭を叩く。

あ、泥棒さんがビクビクしてる。

若い二人がいきなりそんなことを言うから驚いたみたいですね。

「旦那、やっぱり役所に連れて……」

「そういえば人手が足りない所がありましたね、朝夜」

「え？まあ確かに……ってまさかッ!？」

「三人分確保ですね」

ふふと笑う小角さん。

もしかして泥棒に入った人間を使うというのだろうか、この人は。

「はあー。分かったよ、手配しとくよ」

野土ちゃんは何を言っても無駄だと思ったのか、了承した。

「おい、テメエどういってもりだ？」

泥棒の頭らしき男が小角さんに疑いの目を向ける。

当たり前だと思う。

「なんか知らねえが同情や哀れみなら要らねえぜ」

「うん？同情？哀れみ？違う違う。これは利用だよ利用」

小角さんは大袈裟に手を振って否定する。

「僕は人手が足りない。そんなところに暇そうな貴方たちが来た。だからそれを利用する。そう言うわけだから貴方たちも僕らを利用

するといひ。世の中は支え合いでなく、利己主義で成り立っているのわ」

「さてそろそろ寝ますか……」

「そうですねー風も眠くなってきましたよ」

「ではお休みなさい」

「お休みなさいー」

「……………」

「……………」

「いや、仲徳殿？何故、僕の部屋に？そして何故、僕の寝台に？」

「寝るためですよー」

ただいま、風は小角さんと添い寝中なのですよ。

「……………」

「……ZZZ」

「……」

「……」

「……」

「……うー。無言で見るのは反則ですよ、小角さん」

「いや、何か仲徳殿が聞きたい事がありなのかと？」

「風です」

「はい？」

「風の真名は風なのですよ」

「ええ、知ってますよ？」

「何故、呼ばないのですか？小角さんなら皆、真名を許してくれる  
と思うのですよ」

「いや、仲徳殿……」

「風なのですよ」

「いや、仲」

「風です」

「…………風さん」

「ふ・う、なのですよ」

頑かたくなですね、小角さんは。

「ええと……………」

少し考える素振りを見せる小角さん。

「正直に白状しますと僕は朝夜以外の人の真名を呼ぶつもりはないのですよ」

そう言う小角さんの顔は影でよく見えなかった。

「そして出来れば朝夜だけに真名で呼んで欲しい」

そんなことを言われたら　　。

「…………ZZZ」

「…………お休みなさい、程仲徳殿」

6話 程仲徳の猫耳堂日記（後書き）

久々の役小角のコーナーです。

軍服な華琳様に悶える役小角です。

はい、嘘です。だから朝夜と曼珠、武器を仕舞って。あと沙華は武器探さないでね。

ではこれにて最後は朝夜さんにキメてもらいます。

「べ、別に感想とか書いてくれなくてもいいもんね……………で、でも、書いてくれたら……………嬉しい……………かも……………／／／／／」

はい。ツンデレ風な朝夜さんでした。

今回はヤンデレ風の曼珠さんです。お楽しみに〜〜。

7話 マルチ商法には気をつけて。

ふふふ。中々有意義な弁論大会でしたね。

まさかあそこで僕があのような主張をするとは孟徳殿も予想してなかったでしょうね。

一矢報いてやりましたよ。ハッハッハッ。

え？なに？

……手抜き？怠慢？

文句は聞こえませうん。苦情は受け付けませうん。

基本これは外史の外史なのでから……………。

あれ？言い訳になってないような……………？

「あれ？尚香様、お使いですか？」

店の女将が尚香を見つけて、話しかける。

「うん。小角の所に、ね」

「そうかい。偉いね」

尚香の元からの人懐っこい性格はすぐに町人たちと打ち解けていった。

「猫耳堂の旦那のところか………そうだ。ちょっと待ってな、尚香様」

と言って女将は店の中に入っていった。

少しすると小さなベルを持って出てくる。

「それ、何？」

「ちょっと待ってな。もうすぐ来るから、さ」

と女将は空を見上げる。

尚香もつられて見る。

タタタタタ。

何か規則的な音が聞こえる。

人が走る音にしては少し軽い気がする。

タンッ。

区切りの良い音とともに女将と尚香に店のひさしの上から飛び出してきた影が目を遮る。

それは猫など動物にしてはかなり大きい。例えるなら人間一人くらいの大きさ、だ。

チリン。

影が射すと同時に女将が手に持ったベルを鳴らす。

すると影が微かに反応する。

そして道を挟んだ隣の店の屋根に飛び乗り、止まる。

そこには隻腕の商人が屋根の上に着地していた。

「猫耳堂の旦那、ちょっと良いかい？」

屋根の上に乗る小角に女将が手を振りながら呼び掛ける。

「あー、すみません。今、急いでいるので……」

小角はそう言うとまた屋根の上を走り始めた。

「え？今の、何？」

尚香は小角と女将のやり取りにポカーンと口を開けていた。

「あちゃー。ごめんね、尚香様。いつもなら寄ってくれるんだけどね……」

女将は申し訳なさそうに言う。

「え？ああ、別に構わないわよ。それほど急ぎの用じゃないし……。ねえ、小角はいつも屋根を飛び回ってるの？」

「いや、たまにだよ。ああやって屋根を飛び回って用のあるやつがこれを鳴らす」

と手に持ったベルを掲げる。

「そうすると立ち止まって用聞きをしていつてくれるのね」

「へえー、そうなんだ」

「まあ、猫耳堂の旦那が来ないときは……」

「いつもありがとございます。きょうはとびいっただけですか？」  
と女将と尚香の間に沙華が現れる。

「え？……いつの間に？」

「あら、今日は沙華ちゃんかい？いつものを追加で頼むよ」

「ん、わかった」

「それと尚香様が猫耳堂に用があるみたいだから連れていっておく  
れるかい？」

「……………わかった」

一度、尚香を見て頷く沙華。

そして尚香の袖を引く沙華。

「さく」

自分より小さい女の子に引かれる尚香。

尚香は小角のことをよく知らない。

小角が呉に居た頃、特に接点はなく。何度か会ったことはある、がそれほど印象にない。

だからキチンと話すのはこれが初めてなのだ。

「あ、お茶どうぞ、尚香様」

尚香にお茶を出す鄧士。

「すみません、騒がしくて」

と鄧士はチラリと見やる。そこでは……………。

「だから、至高とは猫耳だと言っているのではないかッ!? 普段なクールな彼女がデレるそれを極限に引き出せる猫耳こそが至宝」

『否! 犬耳こそが極地。程よく焼けた肌で元気に野を駆ける娘に合わせた犬耳こそが真理』

「ちがう。兔耳が最高。さみしがりやな彼女に、ほごよくをつながせる兔耳。これが極高の組み合わせ」

やんや、やんや、やんや、やんや。

「…………… 本当にすみません」

頭に手をあて、首を振る鄧士。

「うづん。楽しくていいわよ」

尚香はお茶を受け取りながら言う。

（お姉ちゃんたちからの話とはかなり違うけど……）

「ちょっとお待ち下さい。今、止めますから……」

と野土は助走をつけて……。

「いい加減にしろおおおお！！」

おもいつきり飛び蹴りをかました。

「お待たせしました」

僕はにこやかに対応する。

「いやはや、お見苦しいところをお見せしました」

ははは、と笑う。

「別に楽しかったからいいわよ」

尚香は笑顔で言う。

「全く、旦那は恥ずかしいんだから」

横では呆れた様子で朝夜が立っていた。

「ええと、今日はなにか発注を？」

とりあえず話を進めよう。

朝夜の視線が痛いから。

「うん。お姉ちゃんたちからお使いを頼まれたの。お酒を二樽ほど欲しいのだけど大丈夫？」

「お酒、ですか？」

「うん。出来るだけ美味しいの、だって」

「それは伯符殿と公覆殿からですか？」

「え？そうだけど……」

「ああ。それならご用意できますよ。朝夜」

「はい。少々お待ち下さい、尚香様」

と朝夜は倉庫に在庫を確認に行く。

「そう言えば、何故、ご本人が来ないのでしょうか？公覆殿なら忙しいから分かりますが、伯符殿は家督を仲謀殿にお譲りになられた

と聞いていますか？」

「うん。確かに雪蓮お姉ちゃんは自由奔放に暮らしてるけど、それでも冥琳が目を光らせてるのよ」

「ほほう。やはり……………」

「旦那、持ってきたよ。ホントにこれで良かったの？」

とそこで朝夜が戻ってくる。がその手には酒瓶が2つ。

「あれ？シャオ、確か酒樽2つって言ったよね？」

「はい。お聞きしました」

笑顔で対応。これ、商人の鉄則。

「公謹殿よりお二人には酒を控えさせるように言われておりますので、これぐらいしかお渡し出来かねますね」

「ああー、やっぱりここにも冥琳の息がかかっていたのね」

どうせ他の酒屋も周瑜の息がかかっているのだろうな。

「……………あ、でも。もしお店にお越しの際、ご鼻屑にさせていただければ、もしかしたら、おまけが付くかもしれませんね」

「小角って意外と悪どい？」

「商人な質ですので……………」

笑う僕。

「分かったわ。お姉ちゃんたちに伝えとくわ」

「それではお屋敷までお送りしますよ?」

「ちょっと、旦那、なに言ってるのさ!??」

僕は尚香にそう提案するとすかさず朝夜が食いつく。

「旦那、またそう言ってるサボる気でしょッ!??」

「いやいや、朝夜。酒瓶2つとはいえ、可憐な少女に持たせるのは些か野暮というものですよ」

「ああ言えばこう言うんだから……」

「ささ、行きましょ」

僕は朝夜から酒瓶をふんだくり、店を出て、呉の屋敷へ向かうのだった。

「お、猫耳堂の旦那。またサボりかい？」

「違いますよ。呉の屋敷までお送りしてるのですよ」

「それにかこつけてサボってるんだろ？変わらねえよ」

ハツハツハツと笑う店の親父さんと小角。

「貴女って本当に町の皆に慕われてるのね」

「はい？……まあ、皆様、ご鼻屑にしてくださいさってますからね。僕もそれにお応えしなくてはいけません。ギブ&テイクですね」

「ぎぶ、あんどて、いく？」

「ああ。需要と供給ですね」

はは、と笑って誤魔化す小角。

「そうそう。この前の弁論大会で思ったのですが……」

そう切り出して小角は喋る。

「ウチに『乳房増大の秘薬』なるものが入荷したのですが……」

「えええええ！？」

「あ、往来ですのでお静かに。まだその……本物という確証はないので表には出していないのですが……」

小角は周りを確認してから小声で言う。

「もしよろしければ、お試しになりますか？勿論、危険性は御座いません。それは保証しましょう」

「え、え？いいの？」

「はい。それにお代も結構です。まだ試作中なものですし……。それにこのようなこと貴女様しかお頼み出来ませんし……貴女様だけ、特別ですよ？」

まるで詐欺の商法のような口調の小角。

口元にはあの月の笑みが浮かぶ。

「シャオだけ、特別……」

「はい。貴女様だけでございます」

こうしてまた1人、悪の商法に騙された娘がいた。

7話 マルチ商法には気をつけて。(後書き)

はい。お久しぶりです。役小角ですの。

リアルが忙しいのだそうです。ははは、……はあー。

まあなんと言いますか。すみません。

と言っわけでまた次回。

予告通り、曼珠にキメてもらいます。

『感想や意見を書いてくれるよね？……書いてくれない貴方なんて  
イラナイ』

あれ？ヤンデレってこんなんだっけか？

シュツ！ザクツ！！

うぎゃー！板が！？板がああ！？

8話 狩るものと狩られるもの、そして漁夫の利を狙うもの

「あややや？何故、僕はここに連れてこられているのでしょうか？」

僕は今、都近くの森に来ている。

「すみません。戦力は多いほうがいいので」

北郷がへこへこしている。なんとも威厳のないことだね。だからこそ支持されてるのだからいいのだけど。

ええと、他の面子の紹介をするに……………。

夏侯惇、夏侯淵、許緒に典韋。張飛、馬超、馬岱に魏延。そして甘寧と周泰。

なんだろう、このバラバラな感じは？

「はい。説明を求めます、元議殿」

「なんで春蘭に聞くんですかッ!？」

驚く北郷を、まあ放っておいて。

「魏が一番強いからだッ」

はい。お答えありがとうございます。

「いや、説明になってないから、それ……」

「はあ。つまりこの前の団体戦だけでなく、個人戦もしたいとそういうことですか？」

「なんで分かったんですかッ!？」

ツッコミお疲れ様です、北郷くん。

「小角、知っていたのか？」

「まあなんとなくは」

夏侯淵の問いに僕は答える。

と言いますか、もしかして個人戦の方法って……………。

「では簡単に勝負方法を説明する」

と甘寧が切り出し……………。

「私と明命を捕まえればそちらの勝ち。もし出来なければ敗けた」

……また、それが。

「では私たちは先に森に入る。そちらは一刻後に入ってこい」

と言って甘寧が森へ入っていく。周泰は僕の方に来て……………。

「今度は敗けませんから」

と意気込みを見せてから入っていった。

「はい。頑張ってください」

とりあえず応援しよう。

「小角さん、明命に勝ったことあるんですか？」

横で聞いていたのだろう、北郷がそう訊ねてきた。

「ええ、まあ。呉に居た時に一度だけ訓練に参加させられました。

その時に……………」

「マジですか？ 凄いじゃないですか、それ」

驚きの表情の北郷。

「なんだ小角でも勝てるなら楽勝じゃないか。はーはっはっはっ」

それを聞きつけた夏侯惇が高笑いをしていた。

「いや、春蘭。明命に勝てた小角が凄いのであって、あまり舐めないほうが……」

うわあ。なんか不安だな、この面子。帰ろっかな？

とつかどの国にも属さない僕が参加する意味あるのかな？

「とつかご主人様、ビビリすぎだぜ。あたしたちがいるんだから心配いらなくて」

馬超が北郷の肩をバシバシと叩く。

「いや、皆、明命の恐ろしさを知らないからそう言えるんだって……」

「そう言えば御遣い殿は幼平殿の訓練には……？」

「はい。一度だけ参加しました。もちろん、惨敗でしたけど……」

ああ、表情から察するにかなりのトラウマですね、これは。

「そろそろよいのではないか？」

夏侯淵の言葉にビクンツと肩が揺れる北郷。

「では行くか」

先陣を切ったのは夏侯惇、馬超、魏延だった。

「あ、いつてらっしゃーい」

僕は森の入り口で手を振る。

「いや、小角さんも行くんだよ?」

ちっ。作戦失敗。

馬岱に手を引かれて僕も森へ入る。

さて、どうしようかな、これ……。

と言っわけで最初の犠牲者、魏延。次に夏侯惇、馬超が殺られました。

え?字が違う?

まあ、あまり大差ありませんよ。

「どございよう、小角さん」

初めの雰囲気とは打って変わって、どんよりとした空気が周りを包

む。

「人生諦めが肝心と偉人は言いました」

「えっ、もう諦めるんですか!？」

北郷が頼みの綱を失ったかのように落胆する。

「大丈夫、あの特注の墨を落とす薬ならウチにありますから」

「いや、その心配をしているわけじゃ……って落とせるんですか、あの墨!？」

「ええ、前の物は分かりませんが、おそらく今日使うのはウチの品なので落とすことは可能です」

昨日、届けてきたので間違いないですよ。

「そんな物まで扱ってるんですね、小角さん」

「まあ〜ねえ〜」

はあ、どうしようかな……ん?あれは。

「ふむ。そうか、なら……」

「どづかしたのか?」

夏侯淵が訊いてくる。

「ええ、ちよつと……。そんなことより翼徳殿たちがいませんよ？」  
と僕は指摘する。

確かに張飛たち、チビツ子三人が居なかった。

はい。残り四人。

「くつ。ヤバいぞ、これは」

北郷は嫌な汗をかきながら呟く。

「では皆さん、僕は野暮用を思い出しましたので、別行動で……」

「え？小角さん、それは危ないですつて。今は皆と一緒にいた方が……」

「いやいや、御遣い殿。固まっていた方が狙われやすいですつて。それに僕に狙いが向いている間に対策を立てるのも一つですよ？」  
では、と僕は森の中に歩いていく。

まあ、多分、次に狙われるのは僕ではないのですけどね……………。

「……………うむ。どうやら御遣い殿たちもやられたみたいですね」

僕は森を歩きながら呟く。

「小角さん」

と唐突に目の前に周泰が現れる。

「あ、どうも、幼平殿。良い天気ですね」

まるで道すがら出会ったかのような振る舞いの僕。

「降参ですか？」

「おや？今回は降参があったのですか？」

「この前は貴女が罫を仕掛ける前に捕まえなかったのがいけませんでした。だから今回は仕掛ける前に捕まえます。お覚悟を……………」

と背中の中長刀に手を伸ばす。

「ふむ。確かに今回はまだ仕掛けてないのですが……………」

と後ろを振り返る。

そこには甘寧が今、まさに僕へ飛びつく瞬間だった。

「僕以外が仕掛けていたりして」

ニヤリ。

シユルシユル。スパーツ、ブラブラ。

「なッ!？」

逆さ吊りの甘寧。

「……と、まあこんな感じで」

僕はもう一度周泰の方へ体を向ける。

「くっ。降ろせ、小角ッ!？」

後ろで何やら言っていますが、まあ無視な方向で。

「な、なんで!?!まだ仕掛けてなかったはずなのに……」

「ええ、まあ“僕は”仕掛けてないですよ?」

驚きの表情を見せる周泰。

「幼平殿も迂闊ですね。これが訓練だからといって少し手を抜きすぎではないですか?」

僕が一步前に出ると、周泰は一步後退する。

「ここが戦場であるならば、貴女たちは獲物だけでなく、周りのも

のも警戒するのではないですか？」

「　　ッ!？」

そこで周泰は自分たちの周りを見渡す。

そこには　　。

無数の目が在った。

「　、これは……………」

「　　紗祈、ですよ」

僕は答える。

「僕の手足となって働いてくれている者たちです」

戦乱が終わったと言っても僕としてはまだ気掛かりがありますからね。

五胡は亜兎たちが止めているとは言っても限界がありますしね。それに左慈たちのことも……………。

ま、杞憂に終わってくれれば、それに越したことはないのだけどね。

「いやはや、偶然にも紗祈たちが居ましたからね。助かりましたよ」

はは、と笑い、また一歩進む。

ジリジリ。

「さて、幼平殿。そちらばかり罰があるのでは少々、味気なくありませんか？」

「え、何を……………？」

「勿論、そちらにも捕まった際は罰があるのが公平、と言うものですよね？」

ニマニマ。

「え、あ……………え、と」

「ふふふ……………役得ですね」

「き、きやああ……………！？」

周泰の叫び声が森に響き渡った。

ホクホク。いやはや、良き気分転換になりましたね。

え？何をしたのかって？

ふむ。あまり他言するのは控えたいのですが。簡略的に言っならば……………。

僕の猫耳コレクションが増えましたね。

さあ、三国制覇目指して頑張りますよー！！

8話 狩るものと狩られるもの、そして漁夫の利を狙うもの（後書き）

はい。どうもー。役小角さんです。

今日は重大発表があります。

作者がまた新たに恋姫の転生モノを書くつもりだそうです。

なんじゃそりゃ！？もう、僕はお払い箱なのですかッ！？

なになに……………今度はチート無しを貫きたい？

ハッ。どうせ無理に決まっているくせに、無駄な努力を……………。

「旦那、あんま言うって作者が凹んでこっちが更新されなくなるよ？」

ハハハ。大丈夫さ、作者は精神的DMだから。

「あ、旦那。今、完璧地雷踏んだね。知らないよ、どうなっても」

さあ、分かったか、作者よ。どうせ、無理なのだ。大人しく僕の猫耳帝国への野望を果た

放送事故です。

「と言うわけで旦那が、作者にアレな感じでアレされてるから。この辺で……。作者、目目連の新作は来月辺りに発表予定です。お楽しみに」

『ご意見、ご感想……』

「おまちしています」

9話 ねずみ講にも気をつけて。

「……………」

「おや、文若殿、どうかなさいましたか？」

「ひゃっ!?!」

僕は店の前で中を覗き込んでいた荀イクに声をかける。

「な、なによ。いきなり声かけないでよ、驚くじゃない」

振り返った荀イクは手を振り上げて怒る。

「それは失礼しました。それで文若殿、お店にご用ですか？」

「へ？あ、え…………べ、別に大した用じゃ……………」

「…………まあ、立ち話もなんですから。中へどうぞ」

と僕は荀イクを店の中へ招く。

「小角様、お帰りなさいませッ」

と荀イクと共に店に入ると、中で兔々がメイド服でお出迎え、だった。

「……やあ、兔々さん。さあ文若殿、狭い店ですが、どうぞ」

「えっ！？小角様、無視ですかッ！？」

「小角、これはアンタの趣味なの？」

「ん、いや。多分、そこに隠れてる御遣い殿の趣味かな？」

と僕は店の一角を見る。

「あれ、バレちゃった？」

北郷と朝夜たち三人が出てきた。

「ダメじゃん。旦那、全然反応してないよ、北郷様」

「おかしいな？小角さんはこういうの好きだと思ったんだけどな…

…」

「全く、御遣い殿。あまり朝夜たちを<sup>そそのか</sup>唆さないで下さいよ」

「いや、そういったつもりはないんだけど……」

「アンタ、何してるのよッ!? 政務の方はいいわけ? また愛紗に怒鳴られるわよ」

「お、桂花いたのか? 珍しいな、お前とここで会うなんて、さ」

「うっさいわね。喋りかけないで妊娠したらどうするのよッ」

「なんだよ。喋りかけてきたのはそっちだろ?」

あはは。このやり取り、面白い。

「そう言えば御遣い殿は何故、こちらに?」

「ああ、そうだった。ちょっとお願いがあるんですけど……」

そう言っつて北郷が書簡を僕に渡してくる。

「これなんですけど……」

そこには衣装の草案が書いてあった。

「……ふむ。面白いですね。材料はあるのですか?」

「ああ、近いうちに手に入る」

「いいでしょう。材料が手に入ったらウチに持ってきてくれれば、後はこちらでやりましょう」

「ホントですか！？ありがとうございます」

僕と北郷は固く握手を交わした。

「アンタたち、なにしてんのよ、気持ち悪い……」

僕と北郷のやり取りに引き気味の荀イク。

「ああ、そう言えば、まだ文若殿の用件を聞いてませんでしたね。

……我が猫耳堂に何をお求めですか？」

「え、あ、それは……」

とチラリと北郷を見る荀イク。

「えっ、俺？」

ふむ、そうですね……。

「　　曼珠、沙華」

パチンツと指を鳴らす。

『了解』

「わかった」

ガシツと北郷の両手を掴む二人。

『北郷様はこっち……』

「たいせつなようじ……」

「えっ？あ、あの、ちょっと二人とも……？」  
ずるずると引きずられていく北郷。

「さて、これで話していただけますよね？」

北郷が見えなくなるのを確認してから僕は訊ねる。

「ふ、ふん……」

これでデレれば最高ののに……。

「その、小蓮から聞いたのだけれど……」

「はい」

「そ、その、だから……」

「はい」

「……を……する……」

「はい」

「……ねを……くする……があるって……」

「はい？」

「だ、だからッ！？」      胸を大きくする薬があるって聞いたのよ

ッ！？」

ダンッと机を叩きながら言う荀イク。

「ほほう。文若殿はアレをご所望ですか？」

「……あるのよね？」

「ええ、ありますよ？我が猫耳堂に扱わないもの無しッ、ですから  
ね」

「……で、いくら出せばいいのかしら？」

「そうですね……」

あつ。……………フッフ。良いこと思いつきました。

「文若殿、会員になりませんか？」

「は？今はそんな話は」

「いえいえ、その話ですよ。一つお得な話があるのですよ。僕らが貴女に秘薬をいくつか渡しますから文若殿はそれを他の方にお売りください。その売上げの歩合でこちらにも文若殿に安くお譲りしますよ？」

「……………」

「こちらは商品を広く捌けますし、文若殿は稀少な商品を誰よりも速く、そして安く手に入られます。それに文若殿に進められたお客がまたお客を呼び込めば、文若殿にもその利益が入ります。どうですか、悪い話ではないでしょう？」

「……………そ、そう、ね」

目がグルグルと回っている荀イクが頷く。

「ふふ、契約成立ですね」

僕は笑う。

勿論、月のような笑みで……………。

「それで兔々さんは何故ここに？」

「うう。小角様に放置されました……」

「大丈夫ですよ。次回は貴女がメインの話かもしれないよ？」

「ホントですか!？」

「しれないかもしれませんが」

「どっちですかッ!！」

9話 ねずみ講にも気をつけて。(後書き)

どうもー。悪徳業者、役小角です。

いやいや、冗談ですよ、冗談。

僕がそんなことするわけないじゃないですか

「旦那、また荀イクさんの紹介の方が来ましたよ」

あ、はいはい。今、行きますよ。

ふふ。それではこれにて……。

ご意見、ご感想、お待ちしております。

10話 猫耳堂の夏の一日

「で、兎々さんはなんで内陸へ？」

「遊びに来ました」

え？猫耳尻尾の宇宙人？

あれ？なにやら電波が聞こえますが、無視ですね。

「では何故、メイド服なのですか？」

「小角様がお喜びになると聞きましたので」

「ちなみに、誰にですか？」

「北郷さんです」

「……………」

『幺戯、手紙』

曼珠が一通の手紙を差し出す。

「ん？誰から……………亜兔？なんですかね？」

手紙の中には……………。

「しばらく、兔々の面倒を見てといてくれ。ヨロシク」

と書いてあった。

は？

「不束者ですが、どうぞ末永く宜しくお願い致します」

三つ指ついて、礼儀正しく礼をする兔々。

と言っわけで我が家に家族が1人増えました。

「旦那、さっきの見積書どこ置いた？」

「二番の棚ですよ」

『幺戯、この品はどっち？』

「それは頂姪のところですね」

「よづぎ、これは？」

「それは……………」

「小角様、こちらは？」

「それは……………」

「旦那」『幺戯』「よづぎ」「小角様」

「だあー！！忙しすぎるー!？」

「なんなんだ、これは？どこの策士の罠だよ。」

「なにやら、北郷くんたちが次から次へと催し物を開くから仕事が慌ただしい。」

「小角、ちょっといいかしら？」

「だーッ！次は何ですか!？」

「あ、曹操さん。」

「（ピクピク）……………お邪魔だったかしら？」

曹操がこめかみをピクピクさせていた。

「すみません。少し苛ついていました」

「……はあ、いいわよ。随分と忙しそうね？」

「ええ。なにやら随分と忙しいですよ。と言いますか仕事を回しすぎですよ」

「仕方ないのよ。一刀の案を最も再現出来るのが貴女なのだから」

確かに天の知識を活かしたものはこの時代では難しいだろうな。とは言え………。

「旦那ー、また一人倒れたーッ!!」

「はあ。………宿舎に運んで下さい」

この暑さだ。熱中症者が続出だ。

人手が足りなすぎて僕まで表に出るはめになったのだ。

「最近はこの有り様で。今でもう6人目ですよ、全く」

「本当に大変のようね………」

そのお陰で今、僕は久々に両手仕様だ。

猫の手も借りたいぐらいだ。

「そうですね。……なら、私が手伝ってあげましょうか？」

「……はい？」

いや、確かに猫の手も借りたいとは思っただけど……。

「いや、それは無理だと思いますけど」

「なにかしら、それはこの曹孟徳が力不足だと？」

「いや、そういう意味ではなく……はあ、ではお言葉に甘えさせていただきます」

と僕はその提案を承諾した。

「……小角」

「はい。なんでしょう、孟徳殿？」

「……………」

「孟徳殿？」

「私が浅はかだったわ。……………もう無理」

バタンツと机に突っ伏す曹操。

「なんでこんな暑いのだ……………」

そう猫耳堂は暑いのだ。体感で40 くらいはあるだろうか。

それもそのはず、狭い室内を人が忙せわしく動いているのだ。熱気も籠こもろつと言つものだ。

城は暑いといつても風通りもよく、曹操のようなお偉いさんなら一人の部屋くらいあるのだろう。

まあ、それでも暑いのだ。それがこの猫耳堂ならさながら灼熱地獄だろうか。

「まあ、孟徳殿はお休みください。ご助力感謝しました」

「……………そう、させてもらつわ」

「朝夜、孟徳殿にお水を」

「今、手が離せないから旦那がやってよ」

「いや、僕も……………」

「あ、私やります」

と手を挙げたのは兔々。

「じゃあ、お願いしますね。あ、場所は……」

「分かります。お任せ下さい、小角様」

と器を取りに奥に下がる兔々。

「あら？新しい娘が居るわね」

なにやらニヤリとする曹操。

「貴女の趣味にしては変わってるわね」

「僕の趣味って……」

「幼女趣味でしょ？」

いつから僕はそんな目で見られていたのでしょうか？

「なに言ってるのよ。こんなに若い娘を侍ら<sup>は</sup>しておいて

「まあ、そうですか？兔々に手を出さないで下さいよ？」

「なによ。もう貴女のお手付きなの？」

「違いますよ。兔々に手を出したら五胡が魏に攻め入りますよ」

「あら、あの娘、五胡の娘なの？」

「と言うか亜兔の妹ですよ」

「亜兔と言うとあの春蘭と互角に渡り合う五胡の戦士ね。へえ、あの娘が、ねえ……………」

「あれでも腕前は亜兔とも引けをとらないですよ、兔々は」

まあ、今はメイド服を着ているので分からないかもしれないが…………。

「そうなの。益々興味が湧いたわ」

「お待たせしました」

そこで兔々が水を持って帰ってくる。

「どうぞ」

「ありがとう」

と曹操の手が兔々のお尻に伸びる。

スツサ。

「あら……………」

「何か御座いましたか、曹操様？」

それをヒラリとかわした兎々は言う。

「確かにあの戦闘狂の妹ね」

「誉めていただき光栄です」

二人とも笑みを見せているが目が笑ってない。

「あそこだけなんだか涼しそうですね」

「なら、入ってきたら、旦那？」

遠慮しますよ。

「小角、お邪魔するわよ」

「こんにちは」

そこへ孫権と劉備がやって来た。

「いらっしやいませ、仲謀殿、玄德殿」

「あ、華琳さんじゃないですか。奇遇ですねー」

おやおや、三国の王が揃ってしまいましたね。これで北郷が来たら

……………。

「どうも。小角さん居ます?」

……………。三国の首脳が揃っちゃいましたね。

「と言いますか、仕事をこちらに丸投げして王の方々は暇してるの  
ですか？」

僕は冗談めかして言う……。

『……………』

全員、目を逸そらした。

「ほほう。……………朝夜、曼珠、沙華、兎々。さっさと終わらして仕  
事を送り返してやりましょう」

『はい！！』

「ちょ、小角さん」

全く、王が楽しそうなんて甘いのですよ。

「へえ、これが竜の皮ですか」

「はい。これがあればアレが作れます」

例の意匠のことだ。まあ、水着なんだけど。

この暑さにバテ気味の将たちに涼をとれるようにと北郷が提案してきたのだけど。

「これで合法的に水着姿の女性を見れますね、御遣い殿？」

「え、あ、いや、俺は別に……………」

隠してもバレバレなんですけど。

「それにしても、御遣い殿。これ取ってきたのですよね？」

「はい。兵の皆と協力して……………」

その行動力は賞賛に値しますが、それに龍の肉で夏バテ対策も出来て僕としてはありがたいのでいいですけどね。

「ねえ、旦那」

「何ですか、朝夜？」

「龍の皮ならウチにあるよね？」

「ええ。いくつかが在庫が残ってますよ」

「それ、北郷様には……………」

「言わないでおきましょう」

知らぬが仏ということもあるのですよ。

「では御遣い殿、出来上がり次第お届けしますので」

「はい。よろしくお願いします」

北郷はそう言って店を出ていく。

「では朝夜、これを職人たちに届けて下さい。後」

「……なに？」

「1週間で仕上げさせなさい」

「旦那も楽しみなんだ……」

それは勿論ッ！？

「……だからね、冥琳ってばびびびのよー」

「はあ……」

「ねえ、ちゃんと聞いているの、小角？」

「ええ。聞いてますよ、伯符殿」

いや、ウチは別にお茶を飲んでダべる場所ではないのですが……。

「……………でね。蓮華つたらおかしくて……………」

「あ、伯符殿。お時間はよろしいのですか？」

「大丈夫よ、蓮華に家督を譲ってから何もやることないもの。でね……………」

ウゼエ。……………いやいや。大丈夫、大丈夫。笑顔、笑顔で

接客。

「そ、そうだ。伯符殿、何かご入り用などはございませんか？」

「ないわよ」

じゃあ、何しに来たんだよッ!?

「孫策様、旦那を少々お借りできますか？」

そこへ朝夜が助け船を出してくれる。

流石、朝夜。大好きですよ。

「ぶーぶー。つまんないわよ」

「大丈夫ですよ。代わりの人をお呼びしましたから……」  
不平を言う孫策に朝夜はそう答えた。

あ。

「代わり？誰よ？もしかして鄂士ちゃんかしら？」

「いえ、それは……」

「……雪蓮」

「え」

名前を呼ばれた孫策が後ろを向くとそこには眉間にシワを寄せた周瑜が立っていた。

「め、冥琳……なんでここに？」

「貴女がまた城を抜け出すから探しに来たのよ。全く、家督を蓮華様に譲ってからと言うものの放蕩癖が更にひどくなって……」

周瑜の説教が始まる。

「ふう。助かりました、朝夜」

僕はその場から退散して朝夜の側に立ち、頭を撫でる。

「……別に。旦那が仕事しないとアタイが困るだけだし……」

照れているのかそっぽを向く朝夜。

でも手は払い除けないのですよね。

10話 猫耳堂の夏の一日（後書き）

ええー。誠に勝手ながら小角は少し休載します。

ネタが思いつかないです。

無理があつたのかな？

またネタが思いついたら載せますのでそれまではもう一つの方をお楽しみ下さい。

復帰は未定ですが、早目に復帰出来るよう頑張ります。

それではまた。

11話 暇人の憩いの場（前書き）

久々の更新です。

え？待ってない？

まあ、忘れられても仕方ないですけどね。

次回の更新はいつになることやら……………。

11話 暇人の憩いの場

「今日は商人たちの物の流通に関しての政策について会議を行いました  
と思います」

大広間にて諸葛亮がそう宣言する。

「そして今日の会議には外部講師として小角さんをお招きしてます」

「どうも、役么戯です」

ペコリと頭を下げる。

「よろしくお願いします」

特別講師として招かれた僕。

「それでは先ずは現在の状況の確認を……………」

会議は滞りなく進んでいく。

僕も聞かれれば、出来る限り、分かる範囲で答える。

「……………では続いて治水工事についてですが……………」

うん？なにやら違和感が……………。

「あの、すみません。ちょっといいですか？」

僕は進行の諸葛亮に手をあげて言う。

「僕がここにいる意味ってありますか？」

なにやら商業から外れた議題になってきたのだが……………。

「……………。では先ずは長江の現在の状況を亞莎ちゃんお願いしま  
す」

え！？無視！無視なのですかつ！？

そのまま結局最後まで会議に参加した僕。

途中、いろいろと聞かれたが、門外漢な僕の意見など参考になるの  
だろうか？と思いつつも律儀に答える僕。

「……………それでは今日の合同会議はここまでです。お疲れ様でした」

最後を締めくくり、会議は終了した。

「……………ふむ。帰りますか」

「小角さん、今日はどうもありがとうございました」

僕のところへ諸葛亮がトテトテとやって来る。

「いえ、僕などでお役に立てたのであれば幸いですよ、孔明殿」

僕の元へ来て、ペコリと一礼する諸葛亮。

「それでは僕はこれで、店を朝夜に任せてきてますので……………」

「はい。今日は本当にありがとうございました」

僕が部屋を出ていくとまた一礼してくれる諸葛亮。

ふふふ。これで諸葛亮に借り一つですよ？猫耳帝国の野望は未だ潰えぬのだ……………。

「なあ、小角。私の個性ってなんだと思う？」

「……………」

「私ってそんなに影が薄いのか？私だって頑張っているんだぞ？」

「あの伯珪殿？」

「なんだ、小角？」

「何かお買い求めで？」

「私の個性を探してるんだ……………」

「……………」

ウチはお悩み相談室ではないのだけど…………。

「個性が無いのも……………いえ、なんでもないです」

どうやら僕の前にも他で言われているようだ。

「うう、なんで私は……………」

はあー。最近、ウチに客以外がよく来るようになってしまった。

「ねえ！小角さん、聞いてよッ！」

また、1人。客以外が来ましたね。

「つて、白蓮様！？何してんの？」

「ああ、たんぽぽか……。いや、自分探しを、な」

公孫贖に気づいた馬岱が駆け寄る。

「ふうん、大変だね白蓮様も。でね、聞いてよ、小角さん……………」

「はいはい。今日は何ですか？また孟起殿のことですか？」

馬岱は何かにつけて店にやって来ては馬超に連れられて行くということを繰り返していたのだった。

なんだろう。三国の間では暇人は僕の所に来なくてはいけないのだろうか？

僕にも仕事が……………ある、はずだよね？

「でね、聞いてよ、小角さん！」

「だからな、小角！私の個性は……………」

助けて、朝えもくん！？

「……………（プイッ）」

あ、目を逸らされました。

何故だろう、平和になってからの方が疲れが溜まるのは……………。

『小角（小角さん）聞いている！？』

「はいはい、聞いてますよ」

僕の店は暇人の憩いの場になりつつあった……………。

一応、商店なのに……………。

「小角、遊びに来たわよ……………つて、なんか大賑わいね」

「……………イラッシャイマセ」

「なによ〜。態度悪いわよ〜」

ええ、態度も悪くなりますよ、そりゃ。

「それで伯符殿、何かお買い求めで？」

「別に。遊びに来ただけよ？」

ほらな。これだよ、チキショー。ここは商家だぞ！？

「お邪魔するわよ〜」

まるで自分家のように客間に上がる孫策。

「はあく。とりあえずぶ漬けでも出そうかな？」

てかこの時代に意味が理解されるか分からないな……………。

これで計三人の暇人が集まっているわけだが……………。

「私の個性は……………」

「でね焰耶ってば……………」

「お酒おかわり……………」

いやいや、なにこれ？僕が何かしましたか？最近はキッチンと働いてますよね？

というか孫策さん、なに勝手に店の酒飲んでるんですかッ!?

「代金は旦那の小遣いから引いとくから……………」

「ちょ!？朝夜、何ですかあああ!」

そんな今月は猫耳の材料費で厳しいかったのに……………。

え？店主なのに小遣い制なのかって？

そりゃ、ウチのお母さん（あさや）がね。

あれ？僕の立場って………？

11話 暇人の憩いの場（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

12話 曼珠沙華の花（前書き）

明けましておめでとうございます。

今年もよろしくお願い致します。

12話 曼珠沙華の花

「朝夜……………」

「何だよ、旦那……………」

「あの二人は何をしてるんですか？」

僕は店先で朝夜に聞いてみる。

「……………さあ」

いや、あれを見てそんな乾いた態度でいいんですか、朝夜さん？

と僕は問題の人物を見る。正確には“人物たち”だが……。

シュタ、パシッ。

なんか物凄い勢いで板と柄杓の応戦が店の中で繰り広げられてるんですけど……。

「はいはい。店の人は近づかないですよ。お客様の相手は店先で願いますよ」

「了解しました、代理」

朝夜は店員たちに指示を飛ばしてる。

ガシャン。

あ、流れ弾が窓を突き破った。

………つて店を壊すなよッ!?

「……………それで、一体何だというのですか、二人とも？」

とつか二人がここまで激しく喧嘩？するなんて初めて見るよ。

僕はなんとか二人を止めて話を聞く。

『……………』

そして二人は黙<sup>だんま</sup>りであった。

「はあ……………」

全く、いつもは嫌なくらい仲がいい二人が何故こうなったのやら？

『沙華が悪い』

「曼珠がわるい」

そして二人はこれしか話さないし……………もう、ヤダ。

「はあゝ。もう好きにやりなさい」

その内、仲直りするでしょうから……………。

そう思った時期が僕にもありました。

『么戯、お茶』

と曼珠が僕にお茶を出そうとした時。

「じゃま」

と沙華が曼珠のお盆を引っくり返す。

そしてお盆に乗っていたお茶は宙を舞い、僕の元へ……………え？

「あちゃあああああ！…！」

モロにお茶を浴びる僕。

「よつぎ、おちや」

今度は沙華がお茶を運んでくる。

『させない』

そして今度は曼珠が邪魔をする。

そして宙を舞うお茶。

ハッ。二度も喰らうか！？

僕はヒラリとかわす。

『何をする』

シユルル。

沙華に板を投げつける曼珠。

「あたらない」

それをかわす沙華。

そしてそれは僕の方へ……………え？

ガコンッ。

「痛あああああ！！！」

か、角がああああああ！！！！

「ちょっと曼珠来なさい」

僕は曼珠を呼び出す。

単体で相手するしかない。

先ずは曼珠から事情聴取を。

「それで喧嘩の原因は何なんですか？」

『別に喧嘩なんてしてない』

ムスツとした顔で言う曼珠。

ああもう可愛いな、こんちくしょう。いつもの無表情な顔からは考えられねえな、オイ。

頬つぺたぶにぶにしたい衝動を抑えつつ、僕は曼珠に向き直す。

「別に喧嘩が悪いと言ってるのではないですよ、曼珠。時には必要なことですよ。でもね、それで他者に迷惑をかけてはいけませんよ」

主に僕への被害が半端ねえの。というか僕への被害しかないんだよ。

ナニ、コレ？もしかして僕への嫌がらせですか？

『……………』

黙りですか……………。というか、よく筆談で三点リーダーを使うなよ。

「全く……………」

僕は室内にも関わらず空を仰ぎ見てしまう。

そつえば久しく空を見てないな。

はい、閑話休題にして現実逃避は置いておくとしよう。

「歳としては曼珠の方がお姉さんなんだからね？そこを……………」

『関係ない。これは譲れない』

はあ、誰に似て頑固なんだか……………。

「はい。次の方、沙華」

曼珠と代わり、沙華の事情聴取。

沙華は素直でいい子だよね？

「別にけんかなんてしてない」

おい、お前ら本当に仲良いなッ！？

言い訳も全く一緒かよッ！？

「だからな、別に僕は怒ってるわけじゃなくてな……………」

「かんけない。これはゆずれない」

よしッ、ぜってえお前ら喧嘩してない！

』……………』

「……………」

バチバチと火花散らせる二人。

「ちょっと旦那、解決してないじゃんさ」

「いや、僕にどうしろっていうんだよ、朝夜は」

「はあ、二人の喧嘩の原因本当に心当たりないわけ？」

「ん？なに？僕に何かあるわけ？」

「……………はあ。これだから旦那は……………」

いや、なに？その、この朴念仁は、みたいな目は？

それじゃ僕がまるで釣った魚に餌をやらない北郷くんみたいじゃな

いか？

……うん？今、何だか核心に迫ったみたいなの？

いや、気のせいだよな？いや、でも、そうだな……。……。

「二人、そこに並びなさい」

僕は二人を横並びにして、前に立つ。

「まあ、何で二人が喧嘩してるか知りませんが……」

『喧嘩なんて』

「してない」

いや、うん。君らは仲良いよ、マジで。

「まあ、それはどっちでもいいんですけど……」

と僕は二人に近づく。そして二人の頭に手を近づける。

二人はビクツと肩を震わせるが……。

そして僕は二人の頭を撫でる。

「あまり心配はかけないでほしいものですよ」

僕が手を離すと曼珠は右側、沙華は左側の頭に放射線状の花の髪飾りが付けられていた。

「二人は僕の家族なんですから、ね」

赤色と黄色の髪飾りが揺れる。

「僕に免じて機嫌を直してくれますか？」

二人は自分の頭の髪飾りを触り、お互いの頭を確認した。

そして二人は見つめ合う。

『はあ』

と二人同時にため息を吐いた。

ん？なにか変なことしたか、僕？

いや、確かに気障めがねだったかもしれないけど……。

『沙華』

「うん」

と僕が首を捻っているのと二人は頷き合い。そして僕の左右へ近づく。

「ん、どうかしまし」

チュツ。

え？左右から温かな、そして湿った感覚が……………って、ええええ！！

『么戯』

「よつね」

混乱している僕を余所目に二人は僕から離れた、また正面に立つ。

『「好き」』

「……………」

いや、こつも正面から言われるのは照れるものと言いますか、なんと言いますか、まあ悪くはないものですよね。

12話 曼珠沙華の花（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

ちなみに新作に関するアンケートはユーザーページにて活動報告に行っております。

まだまだ期限はありますのでお答えいただければ幸いです。

新作は1月中頃に投稿予定です。

### 13話 親（前書き）

どうも、しばらく放置気味でしたが、やっと投稿できました。

さて、皆さま、本日5月8日は何の日か知っていますか？

実は……………。

作者、目目連の恋姫二次創作初作品『その空を仰ぎ見る者は……………』の初投稿日です！！

丁度、一年が経ちました。

はい、ただそれだけです。

というわけで二作同時更新です。もう一作は『塵芥』です。

それでは……………。

13話 親

ふわあゝあ、眠いですね。

「なに、欠伸してんのさ、旦那」

いや、朝夜さん。最近、仕事が多くありませんか？また我が国の王たちは怠け始めたのですか？

「いや、ただ年の瀬で忙しいだけだから………てか、口に出てないからね？」

「へ？ああ、すみません。あまりにも眠すぎて喋るの忘れてました」

「いや、それを忘れるってもう病気だし………」

「厳しいなあ、朝夜は」

てか、今言葉無しでも会話成立してなかった？

「旦那………」

「ん？何ですか、急に改まって」

「旦那って家族とかいるの？」

「まあ、そりゃ。僕も人の子ですからね。両親がいなければ生まれはしませんよ」

「その両親って今は……………？」

「健在な筈ですよ。まあ、帰ってないので分からないんですけどね」

「寂しくないの、それ」

「いや、まあどうでしょうね。ウチの親って僕が言うのもなんですけど変わってますから……………」

勿論、こっちの世界の方だが。

「僕が商人として一人旅をしようと相談したら二つ返事で肯定されましたし、別れの時も結構淡泊でしたね」

「いやはや、我ながら中々な両親だと思うよ。」

「それに一度だけ仕送りを送ったんですけどね？送り返されてきたんですよねえ、要らぬの言伝てと共に……………」

「それは流石旦那の両親だね」

朝夜が若干引いていた。

「まあ、でも淡泊であつても冷淡ではなかつたですね」  
それなりに愛情は注いでもらっていたはず……………。

「アタイたちは……………」

といつもより若干暗い口調の朝夜。

「やっぱり血の繋がりがなくちゃ家族にはなれないのかな、旦那？」

「そんなのは」

と僕が答えようとした時。

「朝夜がいつももお世話になっています」

そんな声が聞こえた。

ん？朝夜？僕以外に朝夜の真名を呼ぶ人って居たかな？

いやいや、同名の別人かもしれないよね、うん。

「……………な、なんで」

おや？朝夜、どうかしたのですか？

と僕が朝夜に聞こうとしたら……………。

ダツと声が出た方に走って行ってしまった。

え？いや、べ、別に放置プレイになんてときめかないんだから！

……というわけで、朝夜を追って僕も声の方へ向かう。

とそこには……………。

「なんでアンタらがここにいるんだよッ!？」

朝夜とどこか朝夜に似た一組の男女がいた。

「何を言ってるんだ、父さんたちは朝夜を心配して……………」

「気安くアタイの真名を呼ぶんじゃない！それにアタイはもうアンタらのことなんで親だともなんとでも思ってる！さっさと店から出てけッ!！」

男の方が朝夜に手を差し出したが、それを払い劇号する朝夜。

「つく!……………!？」

と男は一瞬だけ苦虫を潰したような顔をしたが僕と目が合うとすぐにそれを引っ込めた。

……………ん？

「朝夜。あの時はごめんよ。父さんも母さんもどうかしてたんだ。

お金がなくて働き口もなかなか見つからない。そんな状況が父さんたちをおかしくさせたんだ」

「そうよ、朝夜。でも大丈夫よ。父さん、仕事を見つけたのよ。これで昔みたいに三人で暮らせるわよ」

そして笑いながら朝夜に近づくと二人。

……………んん？

「う、うるさい。アタイはもうアンタらなんか必要ない！アタイは旦那たちとこの猫耳堂で暮らすんだ！」

と僕の方を見る朝夜。

つられて男女も僕を見る。

……………んんん？

「貴方が朝夜をここまで育ててくれた方ですか？」

「え、まあ……………客観的に見ればそうなるのかもしれないね」

男の方、というか話の流れからして朝夜の父親が僕の方を近づいてきた。

「初めまして。私どもは朝夜の両親でございます」

何かよそよそしい態度だった。まあ、別に僕はこの人たちとなんら接点がないから、かもしれない。

それに一応身だしなみはできている。仕事をしてはいるのだろう。ただ……着なれてない感じがする。

「へえ、朝夜に両親がいたのですね。これは驚いた」

「旦那はアタイのこと、どう思ってたのさ。木の根から生まれたとでも？」

「……………え？違うのですか？」

「真顔で言うなッ！この馬鹿！！」

「痛ッ、痛いですって朝夜。……………それでその朝夜の両親がウチに何かご用ですか？」

蹴ってくる朝夜を宥めて、僕は朝夜の両親に訊ねる。

「え？……………いや、朝夜と一緒に暮らそうと」

今までの話の流れから察すること位できるだろう、と言いたげな顔で僕を見る朝夜の両親。

「ふうん」

その人たちに対して冷めた態度になる僕。

「やっぱり子は親と暮らすべきですよ？貴方もそう思いませんか？」

と何故か僕を説得しようとする父親。

「旦那……………」

そして救いを求めるかのような朝夜の視線。

そして僕は……………。

「宿は？」

『はい？』

「宿は取ってあるんですか？」

「え、ええ、一応……………」

「そうですか。朝夜、送って行って差し上げなさい」

「え？旦那、何を……………」

「積る話もあるだろうから、遅くなっても構いませんよ」

とそれだけ言って僕は奥へと下がっていった。

(旦那、何であんなことを……………)

「朝夜、どうかしたのか？」

朝夜が考え事に耽<sup>ふけ</sup>っていると朝夜の父が声をかける。

「……………別に何でもないよ」

ぶっきらぼうに朝夜は答えて歩みを速める。

両親の宿の場所は聞いている。店の名前だけでも朝夜にとっては迷うことなく行けるくらい有名な大衆の宿屋だ。

(何だよ、旦那。もうアタイなんて要らないって言うのかよ……………)

朝夜は苛々しながら店へ歩く。

もし朝夜に冷静さが少しでも残っていたならば、両親の表情に気づけたかもしれない。

宿に着いた朝夜はそのまま帰ろうとしたが両親が強引に部屋に上がらせて、お茶を振る舞われていた。

だが……………。

「……………アンタら、何者だい？」

いきなり数人の男たちが部屋に入ってきた。

「俺らはただの金貸しさ。お前の両親に親切で金を貸してやったなあ」

と先頭にいた男が下衆な笑みを浮かべる。

「でもよお、テメエんとこの両親は金が返せねえてんだよ。借りたもんは返すのが筋だよな？」

分かるよなあ？、と男は朝夜を見下ろす。

「……なにさ。アタイに払えつてのかい？」

「話が早くて助かるね、嬢ちゃん」

男はニヤリと笑う。

「アンタら、頭悪いだろ？アタイが何でそんなことしなきゃいけないのさ。そもそも自分を捨てた親なんかどうなるうと構わないんだよ」

朝夜はキツと真っ直ぐに男を睨み付け、そう言った。

「おお、怖いねえ。でもよお、そう意気がっていられるのも今の内だぜ？」

と男はおどけた様子で懐から何かを取り出す。

刃物が出てくるのかと朝夜は身構えるが出てきたのは書簡だった。

「これが何だか分かるか？分かるよな、嬢ちゃんも商人だろ？」

「……………ッ!？」

それは朝夜の両親が金を借りる際に書いた借用書だった。

商業面において小角の出した一つの案件。それが借用書、若しくは誓約書の有効化だった。

この時代、不確かな口約束では貸す側も借りる側も不都合なことを隠蔽してしまう。そこで小角が立案したのは紙、若しくは竹管にきちんと示すことだった。

これはいくら朝夜とは言え、これを破れば罰せられる。

そして男の持つ書簡には両親が返済できなかった時は子が返すことが記されていた。

「なッ!?!……………そ、そんなものアタイは知らない!?!」

「だかよお、こうしてキチンと書いてあんだよ。いくら、嬢ちゃんが何を言おうが俺たちが役人にこれを見せれば……………分かるよな？」

「くっ……………」

顔をしかめる朝夜。

「……………それ、写しはとってあるんですか？」

「いや、ねえよ。これが原本だ。写しなんてとってたら金がかかってしゃあねえからな」

「それはそれは。 三流ですね」

「ああ？誰に、もの言ってるやがる………って誰だ、テメエ！？」

と男は振り返るとそこには小角がいた。

「全く。三流風情が商人の真似事なんかするもんじゃないですよ？」

僕は手に持った借用書を見ながら言う。

「うわっ、形式とかあったもんじゃないな、これ。これが正式な書類って認められるのかな？」

僕は案の見直しを考えてみる。

「て、テメエ！？いつの間に返しやがれ！」

「返せと言って素直に返すのはお人好しだけですよ？」

僕は男の伸びてきた手をヒラリとかわす。

「さて、そこのお兄さん。借用書は今、僕の手元にあります。この意味、分かりますか？」

「……………あぁ？」

はぁー。これだから三流なのですよ。

「つまり、この借金は僕が取り立てるといっことです」

「なッ！？そんな馬鹿な話が……………」

「あるんですよ」

僕は借用書を男に見せながら言う。

「だって　その為に僕はこの案を通したのだからね」

僕は口を月のように歪めて笑う。

「くっ。……………なら、テメエからその借用書を奪えばいいんじゃないかねえか」

「ふふん。それができるかな？」

「何を言ってるんだ。テメエは周りの状況が分かってんのか？」

周りの男が僕を囲う。

「はぁ……………。全く、本当に三流、三下だね、君たちは」

僕はため息を吐く。

「君たちは僕を知っているかい？」

「はぁ？知らねえよ、誰だろうと………」

「僕は役小角。この洛陽の都で商家『猫耳堂』の店主であり、そして  
この洛陽の商家を牛耳る者だ」

再び口が月のような形を作る。

「この洛陽に僕の息のかかっていない商家はないんだよ。そして宿屋も立派な商家、だよな？」

ニヤリ。

『ッ！？』

部屋に居た全員が視線を感じる。

それは壁や床、天井そして外と内。全て関係なくありとあらゆる方向から視線が感じられた。

「これは……紗祈？」

いち早くそれを知る朝夜が気づく。

「周りの状況が分かってないのは、さてどっちでしょうね？」

僕は笑みを浮かべたまま、男たちを見る。

あははつ。顔面蒼白とはこのことだね。

「さて、選択肢だよ。このままこの洛陽から“生きて”出ていくか、それとも」

「うひゃー!!お助けえ!!」

とドタバタと次々に逃げ出していく男たち。

「ちよつと、人の台詞は最後まで聞いてよ!?僕がこれ考えるのにどれだけ時間をかけたか……って、もう居ないし」

全く、最近の悪徳業者は意気地がないなあ。

「さて、貴方たちも出ていってもらえますか?」

僕は男女二組にも言う。

「え?」

え?、じゃないからね。もう、流れを読んでよね。

「貴方たちもさっさと洛陽から、いや、僕たちの前から消えてもらえますか、と言ったんですよ」

「え、いや……あの」

「それともきちんと言った方がいいですか?朝夜をダシに僕からお

金を巻き上げようとあの人たちと画策していたのでしょ？ほら、お仲間はもう行っちゃいましたよ」

「くっ……」

男の方が苦虫を潰したような顔をする。

本当にバレないかと思っていましたのすかね？素人に三流風情が僕を騙すなんて一生かけても無理だと言っのに。

と二人は渋々と部屋から出ていく。

「あ、そうそう言い忘れましたが、二度と僕たちの前に現れてはダメですよ？僕は温厚な性格ですけど、ウチの“家族”に手を出されて二度も黙っているつもりはありませんから、ね」

「ちとど……」

「……旦那」

一息ついた僕に朝夜がおずおずと顔を向ける。

「ごめん。また、アタイ旦那に迷惑を……。最近、仕事も順調で調子に乗ってたのかもしれない」

うん？珍しくしおらしいですね。

「アタイだって、反省くらいするぞ……」

「だから、僕は言葉に出していないのですけど……」

「言葉にしなくても分かるさ。だってアタイは旦那の丁稚なんだから……」

「それは嘘ですね」

「え？」

「だって、分かっているなら謝るなんてしませんよ。別に怒ってないですから。それにね、朝夜……」

僕は朝夜の頭に手を乗っけて、撫でる。

「朝夜は僕の大切な家族です。血が繋がっていろいろがいますが家族ですからね」

「旦那あ……」

「それに家族で血が繋がっているのは親と子です。父と母は血は繋がっていない赤の他人同士でしょ？」

「……それって、もしかして」

と朝夜が頬を赤く染めたその時……。

『いい雰囲気……』

「抜け駆けはいけない……」

曼珠たちが現れる。

「曼珠ちゃん！？沙華ちゃん!？」

曼珠たちに驚いて、僕との距離を離す朝夜。

『……………』

そしてジト目で朝夜を見る二人。

「それで首尾はどうですか、二人とも？」

『万全』

「門に手配済み」

僕は二人に確認を取るとサムズアップで答える二人。

「何の話をしているの？」

「ああ、さっきの人たちのことですよ。門の所に警備の兵さんを集めてもらって捕まえてもらうんですよ」

「え？見逃したんじゃない？」

「朝夜、まだまだですね。この僕がやられたままただで帰すわけないじゃないですか。あの方たちにはきっちりお礼をしなくてはね、

フフフ

さあ、どう料理してあげましょうか？

「旦那……。やっぱり旦那は旦那だね」

おや、何故か朝夜がいい笑顔ですね。それでは今ならこの最新作の猫耳を……。

「着けないからね」

o r z

「全く、油断も隙もないんだから……」

『そう、朝夜はこの犬耳を着ける』

「ちがう。この兎耳……」

「……それも着けないから」

o r z  
x 3

「全く………ふふ」

三人そろって床に手をつく僕らを見て、笑みをこぼす朝夜。

(……いつまでも一緒だよ)

「ちなみに僕らも朝夜の考えてることくらいは分かりますから、今の心の声も聞こえてますよ?」

『うんうん』

「……（じくり）」

「ッ!?!」

あはは。顔を真っ赤にして可愛いんだ、朝夜。

「……わ」

「わ?」

「忘れるおおおおお!?!」

こうして僕らの日常は続いていくのだった。

あれ?最終回っぽいぞ?いやいや、まだまだ続くからね?

13話 親（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9967m/>

---

その空を仰ぎ見る者は..... ~野望は終えぬまま~

2011年5月8日01時18分発行